

(2) 特別支援学校のスポーツ環境に関する調査

主な調査結果

特別支援学校の6割が知的障害、8割に重度・重複障害者が在籍

全国の特別支援学校の障害種別の内訳は、知的障害の単置校が5割と最も多く、次いで肢体不自由の単置校、知的障害と肢体不自由の併置校がそれぞれ1割となっていた。重度・重複障害者が在籍している学校は、全体の8割で、併置校では、ほとんどの学校に在籍している。【図表 2-2、2-9】

運動部活動・クラブ活動の実施は6割で、聴覚障害、視覚障害で特に盛ん

運動部活動やクラブ活動などを通年で実施している学校は全体の6割だった。障害種別にみると、聴覚障害の単置校では9割、視覚障害の単置校では8割の学校で運動部活動・クラブ活動が行われていた。【図表 2-10、2-11】

視覚障害はフロアバレー、グランドソフト、STT、肢体不自由はボッチャ、ハンドサッカーを実施

小学部から高等部を通じて、全体的に実施率が高かった運動部活動・クラブ活動の実施種目は、「陸上競技」と「サッカー(ブラインドサッカーを含む)」であった。視覚障害では、「フロアバレーボール」「グランドソフトボール」「サウンドテーブルテニス(STT)」、肢体不自由では、「ボッチャ」「ハンドサッカー」の実施率が高く、障害種別による違いがみられた。また、運動部活動・クラブ活動の指導者、サポートスタッフについては、すべての学校で教職員が務めていたほか、外部指導者がいる学校もあった。【図表 2-19、2-20、2-23、2-29】

体育館、グラウンドは5割以上が一般に開放し、卒業生中心の障害者スポーツ団体も利用

特別支援学校の体育施設の保有率は、「体育館」「グラウンド」が8割以上、「プール(屋内、屋外)」が約7割であった。体育施設の開放率は、「体育館」「グラウンド」が5割以上、「プール(屋外)」が3割以上となっている。学校開放施設を利用したスポーツ活動は、「地域の健常者からなるスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」が5割で最も多いほか、「卒業生を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」も3割の学校で行われていた。【図表 2-43、2-44、2-45】

運動部活動・クラブ活動が卒業生のスポーツの場としても

運動部活動・クラブ活動の3割で卒業生が練習に参加しており、部活動・クラブ活動が在校生のみならず、卒業生にとっても運動・スポーツの場となっていることがわかる。障害種別にみると、聴覚障害において特に卒業生が参加する活動の割合が高かった。【図表 2-32】

運動部活動の指導を通じて、社会性の向上、卒業後のスポーツ活動機会の充実に期待

事例調査から、学校が運動部活動・クラブ活動を行う目的として、卒業後のスポーツ活動機会の充実に意識した指導が行われていることが明らかとなった。校外でのスポーツ活動を積極的に行うことで、他の特別支援学校や一般校の児童生徒との交流が図られるとともに、公共交通機関を利用して大会会場までひとりで移動するなどの経験が、児童生徒の社会性の向上につながると期待している。

1. 調査概要

1. 1 調査目的

本調査は、全国の 1,211 の特別支援学校を対象に悉皆調査を行い、学校に関する基本情報、体育の授業以外でのスポーツ・レクリエーション活動、運動部活動やクラブ活動の状況、スポーツ施設や指導者の情報等、幼児児童生徒の学校でのスポーツ・レクリエーション活動に関する情報を整理、把握することで、今後の方策検討における基礎情報とすることを目的とする。

1. 2 調査対象

平成 24 年度全国特別支援学校一覧(2012 年 5 月 1 日現在)をもとに、全国の特別支援学校(1,211 校。分校、分教室を含む)を対象とした。

1. 3 調査協力

全国特別支援学校長会

1. 4 調査方法および回収結果

【調査 1】質問紙調査

(1) 調査方法

記名式の質問紙調査

回答は、郵送、電子メール、FAX で受け付けた。

(2) 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・学校の基本情報(幼児児童生徒数、重度・重複障害者の在籍の有無など)
- ・通常の体育の授業以外の活動(校内、学校が関わる校外の活動、地域での活動)
- ・部活動やクラブ活動の状況(運動部・クラブの有無、実施種目、対外試合への参加、活動時間、卒業生の参加など)
- ・体育の授業や部活動・クラブ活動以外のスポーツ活動
- ・教職員、幼児児童生徒と障害者スポーツの関わり
- ・スポーツ施設の状況(施設の種類、開放状況など)
- ・児童生徒の自主的なスポーツ活動につなげるための配慮
- ・今後、重要だと考える取り組み

(3) 回収結果

回収数は 909 校(回収率 75.1%)であった。

(4) 調査期間

2013年9月12日～2013年11月20日

【調査2】事例調査(ヒアリング調査)

(1) 調査方法

地域の特別支援学校における部活動・クラブ活動の状況や学校体育施設の利用状況、学校体育施設を拠点とした障害者のスポーツ活動状況などを明らかにするために、担当者に対して聞き取り調査を実施し、3件の特別支援学校の事例をまとめた。

(2) 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・部活動・クラブ活動(サークル活動含む)の活動状況
- ・教職員の障害者スポーツとの関わり
- ・学校体育施設の開放状況
- ・学校開放施設で行われている活動や利用団体
- ・障害者のスポーツ活動を進めるうえでの取り組み

(3) 調査期間

2013年10月～2014年1月

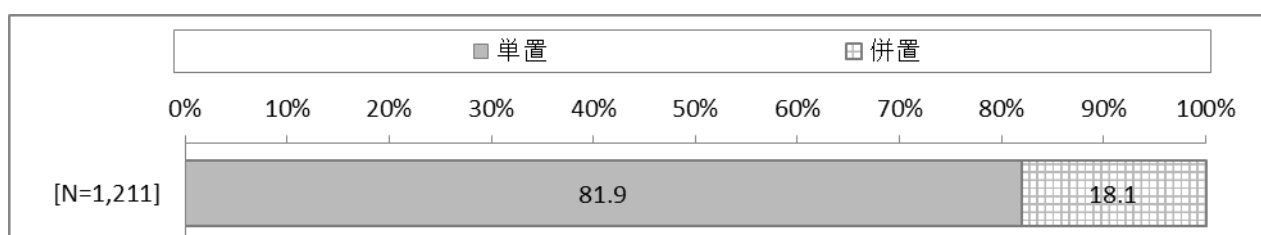
2. 調査結果(質問紙調査)

2. 1 学校属性

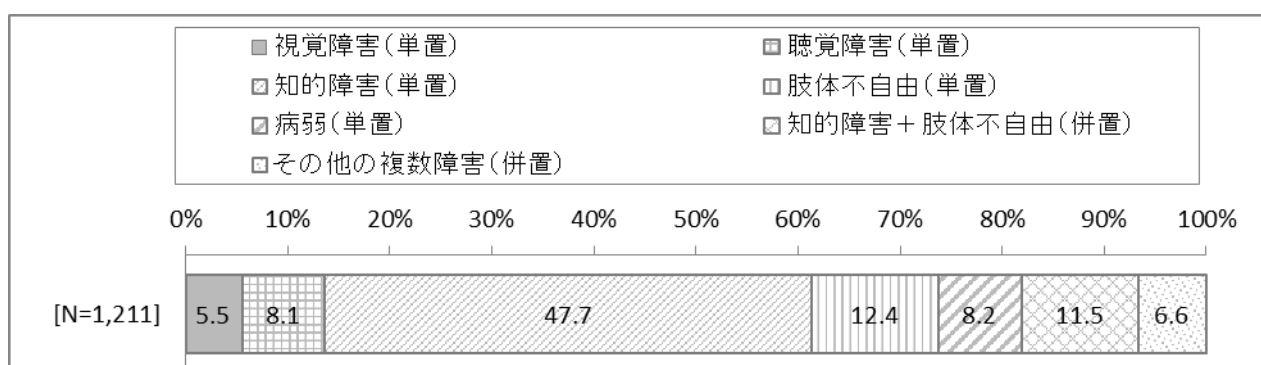
(1) 調査対象の属性

調査対象(母集団)の内訳は、単一障害に対応している学校(以下、単置校)が81.9%、複数障害に対応している学校(以下、併置校)が18.1%であった(図表 2-1)。障害種別では、「知的障害(単置)」が47.7%で最も多く、約半数を占めていた。次いで「肢体不自由(単置)」(12.4%)、「知的障害+肢体不自由(併置)」(11.5%)であった(図表 2-2)。学校形態別では、本校が約8割を占め、「分校」(9.2%)、「分教室」(11.5%)がそれぞれ約1割であった(図表 2-3)。

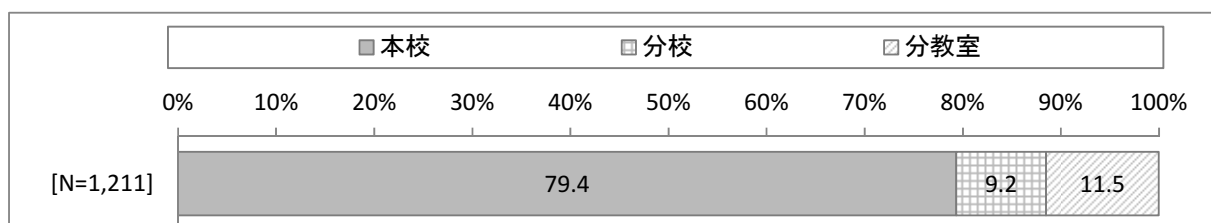
図表 2-1 対象学校の属性(単置・併置別内訳)



図表 2-2 対象学校の属性(障害種別内訳)



図表 2-3 対象学校の属性(本校・分校・分教室別内訳)



また、学部タイプ別にみると、「小学部・中学部・高等部」がある学校が55.8%と最も多く、次いで「高等部のみ」(13.5%)、「小学部・中学部」(11.7%)、「幼稚部・小学部・中学部・高等部」(11.5%)であった(図表 2-4)。

図表 2-4 対象学校の学部タイプ

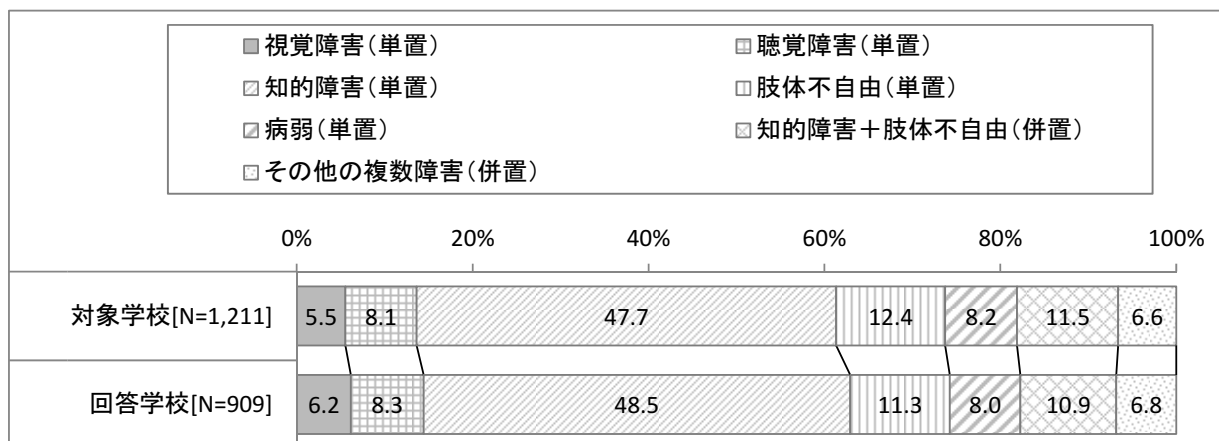
(N=1,211)

学部タイプ	割合 (%)
小学部・中学部・高等部	55.8
高等部のみ	13.5
小学部・中学部	11.7
幼稚部・小学部・中学部・高等部	11.5
幼稚部・小学部・中学部	2.7
小学部のみ	1.7
幼稚部・小学部	1.1
中学部・高等部	1.0
幼稚部のみ	0.4
中学部のみ	0.4
小学部・高等部	0.1

(2) 回答した学校の属性

回答した学校の属性は、「知的障害(単置)」が最も多く 48.5%で、次いで「肢体不自由(単置)」が 11.3%であった。併置校は「知的障害+肢体不自由(併置)」が 10.9%となり、調査対象の母集団と同様の構成であった(図表 2-5)。

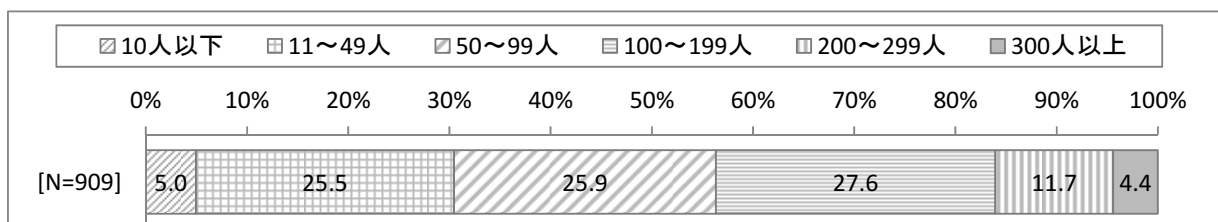
図表 2-5 学校の属性(1人以上在籍する障害種別内訳)



(3) 幼児児童生徒数

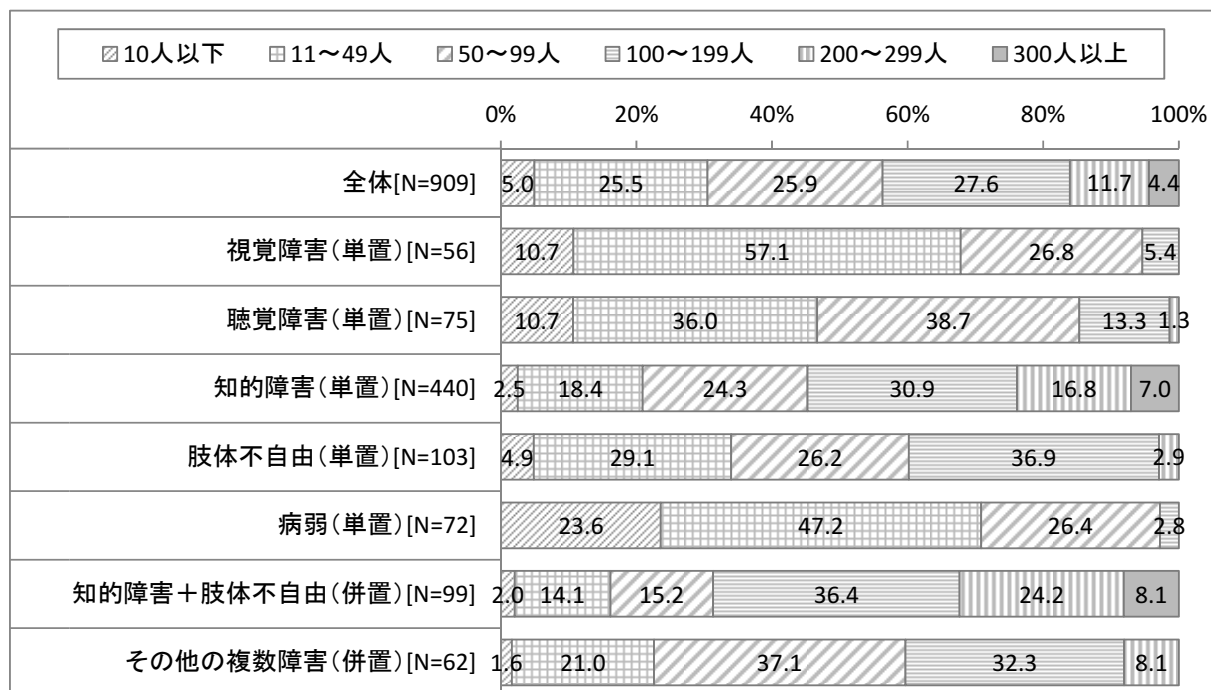
2013年5月1日現在の幼児児童生徒総数は、「100~199人」が 27.6%で最も多く、次いで「50~99人」(25.9%)、「11~49人」(25.5%)であり、100人未満の学校が過半数を占めた(図表 2-6)。

図表 2-6 幼児児童生徒数



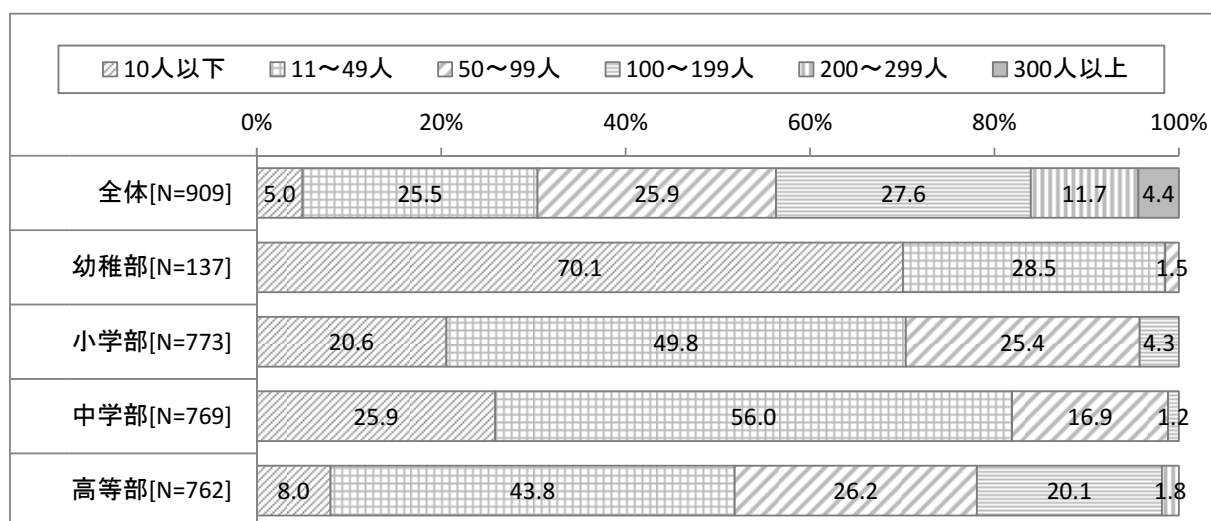
障害種別では、幼児児童生徒数が 100 人未満の学校の割合が最も高かったのは、「病弱(単置)」(97.2%)で、次いで「視覚障害(単置)」(94.6%)であった。200 人以上の学校の割合が最も高かったのは、「知的障害+肢体不自由(併置)」(32.3%)で、次いで「知的障害(単置)」(23.8%)であった(図表 2-7)。

図表 2-7 幼児児童生徒数 (障害種別内訳)



部別では、「幼稚部」の約 7 割が幼児数「10 人以下」で、小規模校が多いことがわかった。「小学部」の約 7 割、「中学部」では約 8 割が児童生徒数 50 人未満であった。対して、「高等部」では、約 2 割が生徒数 100 人以上であった(図表 2-8)。

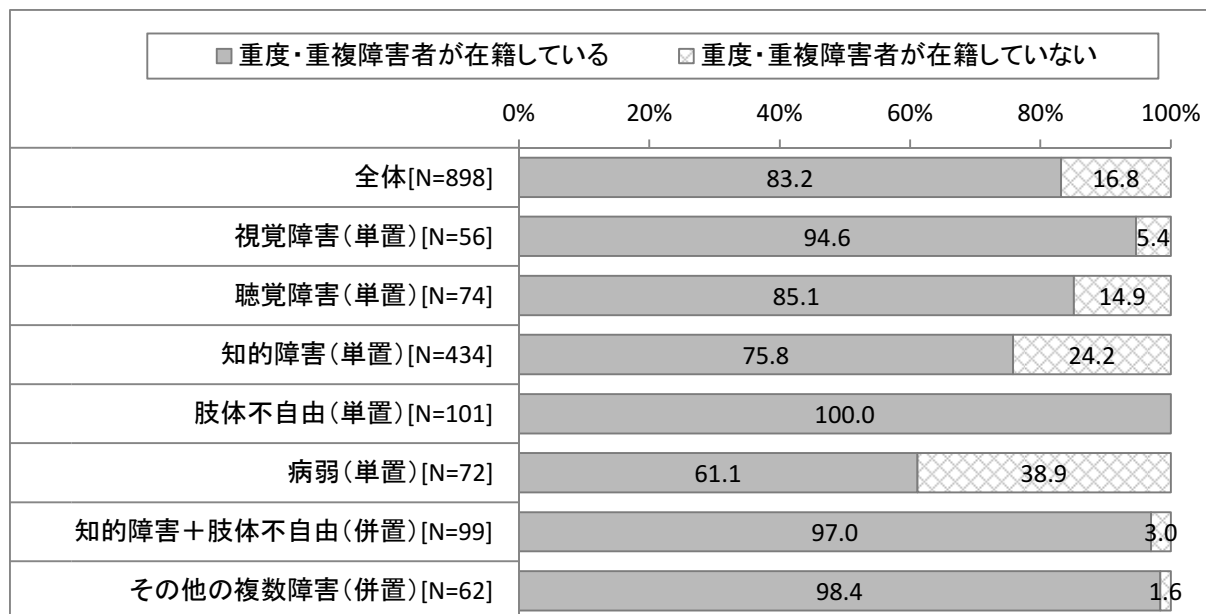
図表 2-8 幼児児童生徒数 (部別内訳)



(4) 重度・重複障害者の在籍

重度・重複障害者が在籍している学校は、全体の83.2%であった。肢体不自由の単置校ではすべての学校に、併置校でもほとんどの学校に重度・重複障害者がいることがわかった(図表 2-9)。

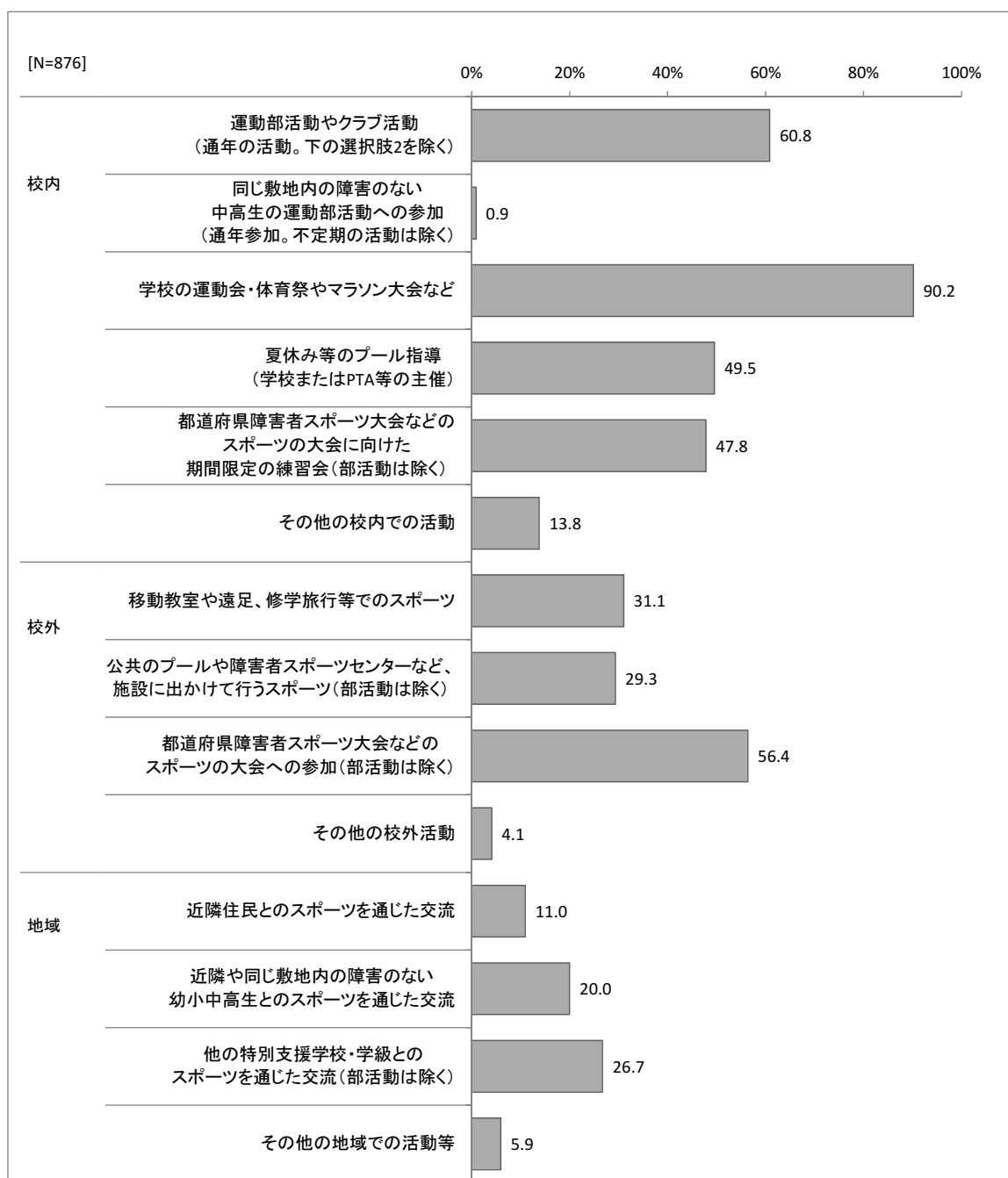
図表 2-9 重度・重複障害者の在籍



2. 2 体育の授業以外におけるスポーツの機会について

通常の体育の授業以外の活動(教育課程外を含む)については、幼児児童生徒がスポーツをする機会として、「学校の運動会・体育祭やマラソン大会など」が90.2%と最も多く、次いで「運動部活動やクラブ活動(通年の活動)」(60.8%)、「都道府県障害者スポーツ大会などのスポーツの大会への参加(部活動は除く)」(56.4%)であった(図表 2-10)。「その他の校内での活動」(13.8%)は、朝活動、放課後活動、自立活動・総合活動などで、「その他の校外活動」(4.1%)は、ほとんどが種目別スポーツ大会、「その他の地域での活動等」(5.9%)は、地域のスポーツクラブでの活動、近隣スポーツ施設主催のスポーツ大会への参加などであった。校内の活動やスポーツ大会への参加に比べて、地域でのスポーツを通じた交流は少ない。

図表 2-10 体育の授業以外におけるスポーツの機会(複数回答)



障害種別に、通常の体育の授業以外の活動(教育課程外を含む)における幼児児童生徒がスポーツをする機会についてみると、「学校の運動会・体育祭やマラソン大会など」では、「肢体不自由(単置)」、「病弱(単置)」を除く全ての障害種で9割以上が実施していた(図表2-11)。また、「運動部活動やクラブ活動(通年の活動)」においても、「肢体不自由(単置)」、「病弱(単置)」を除く全ての障害種で6割以上が実施しており、特に、「聴覚障害(単置)」(90.5%)と「視覚障害(単置)」(80.4%)では8割を超えていた。

図表 2-11 体育の授業以外におけるスポーツの機会(障害種別)

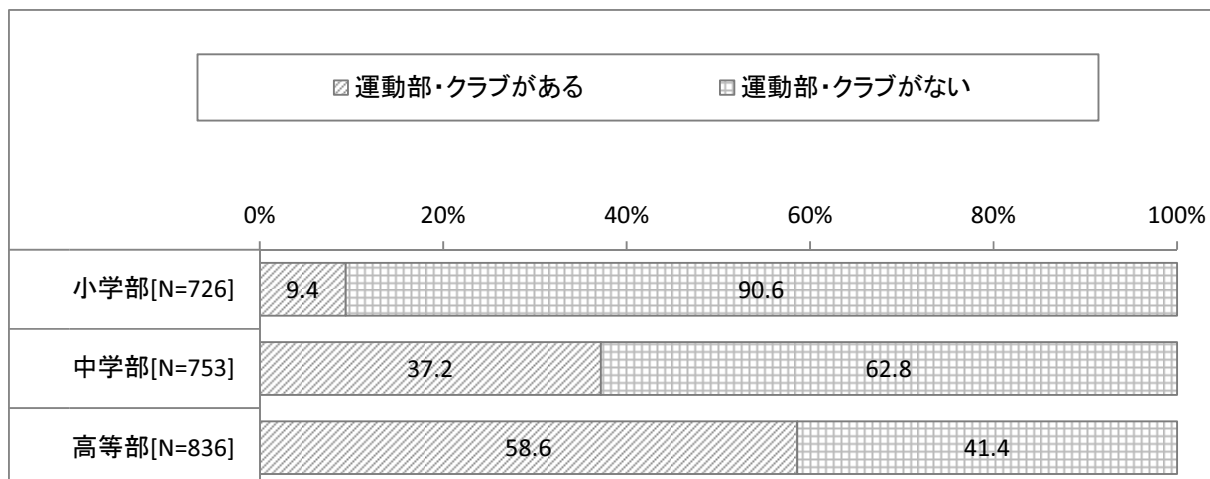
		視覚障害 (単置)	聴覚障害 (単置)	知的障害 (単置)	肢体不自由 (単置)	病弱 (単置)	知的障害＋肢体不自由 (併置)	その他の複数障害 (併置)
		N=56	N=74	N=439	N=95	N=54	N=98	N=60
校内	運動部活動やクラブ活動 (通年の活動。下の選択肢2を除く)	80.4	90.5	61.0	29.5	29.6	70.4	66.7
	同じ敷地内の障害のない 中高生の運動部活動への参加 (通年参加。不定期の活動は除く)	1.8	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	1.7
	学校の運動会・体育祭やマラソン大会など	96.4	95.9	93.2	77.9	66.7	91.8	93.3
	夏休み等のプール指導 (学校またはPTA等の主催)	37.5	39.2	56.3	51.6	18.5	53.1	43.3
	都道府県障害者スポーツ大会などの スポーツの大会に向けた 期間限定の練習会(部活動は除く)	67.9	29.7	48.1	43.2	14.8	68.4	53.3
	その他の校内での活動	7.1	6.8	14.4	14.7	37.0	11.2	6.7
校外	移動教室や遠足、修学旅行等でのスポーツ	39.3	45.9	31.7	20.0	14.8	29.6	35.0
	公共のプールや障害者スポーツセンターなど、 施設に出かけて行うスポーツ(部活動は除く)	33.9	24.3	28.9	26.3	27.8	33.7	33.3
	都道府県障害者スポーツ大会などの スポーツの大会への参加(部活動は除く)	71.4	50.0	57.2	50.5	18.5	72.4	61.7
	その他の校外活動	3.6	10.8	3.2	2.1	5.6	2.0	8.3
地域	近隣住民とのスポーツを通じた交流	7.1	17.6	12.5	4.2	9.3	10.2	8.3
	近隣や同じ敷地内の障害のない 幼小中高生とのスポーツを通じた交流	14.3	44.6	18.0	17.9	14.8	18.4	20.0
	他の特別支援学校・学級との スポーツを通じた交流(部活動は除く)	26.8	18.9	28.2	18.9	9.3	38.8	33.3
	その他の地域での活動等	8.9	6.8	5.7	8.4	3.7	5.1	3.3

2. 3 運動部活動・クラブ活動

(1) 運動部・クラブの有無

運動部やクラブがある学校は、「小学部」では 9.4%、「中学部」で 37.2%、「高等部」58.6%であった(図表 2-12)。

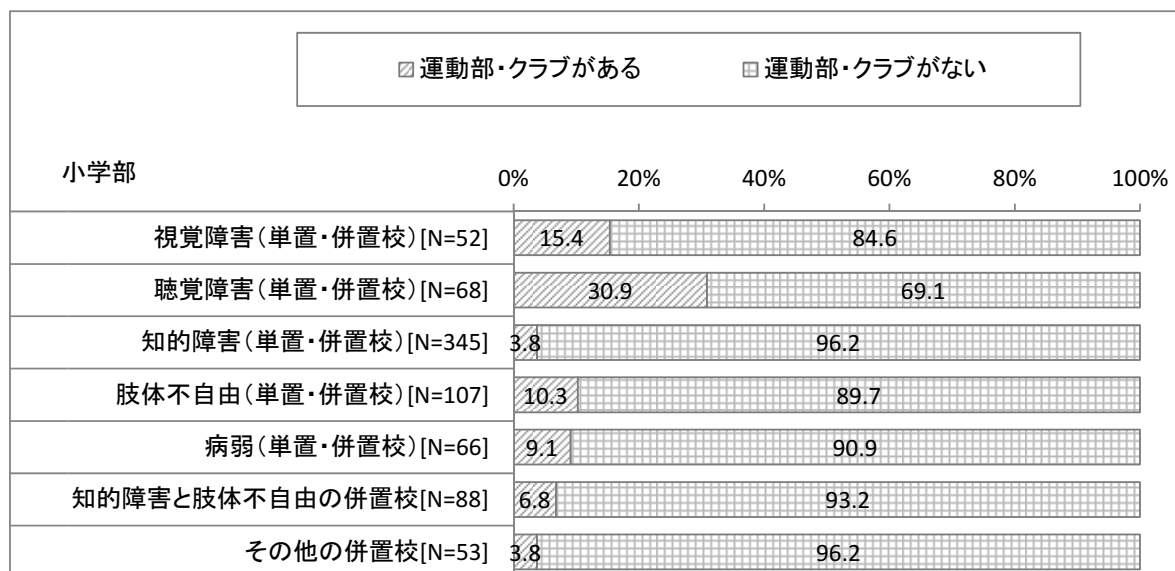
図表 2-12 運動部・クラブの有無



注)有効回答数 876 のうち、学部ごとに運動部・クラブの質問に回答した学校を対象に集計。

部別にみると、「小学部」では、「聴覚障害のみ」が約 3 割で、他に比べて割合が高かった(図表 2-13)。「中学部」では、「視覚障害のみ」「聴覚障害のみ」が 7 割以上の学校にあり、「高等部」では、「肢体不自由のみ」「病弱のみ」以外の障害種で半数を超えていた(図表 2-14、図表 2-15)。

図表 2-13 運動部・クラブの有無(小学部・障害種別)

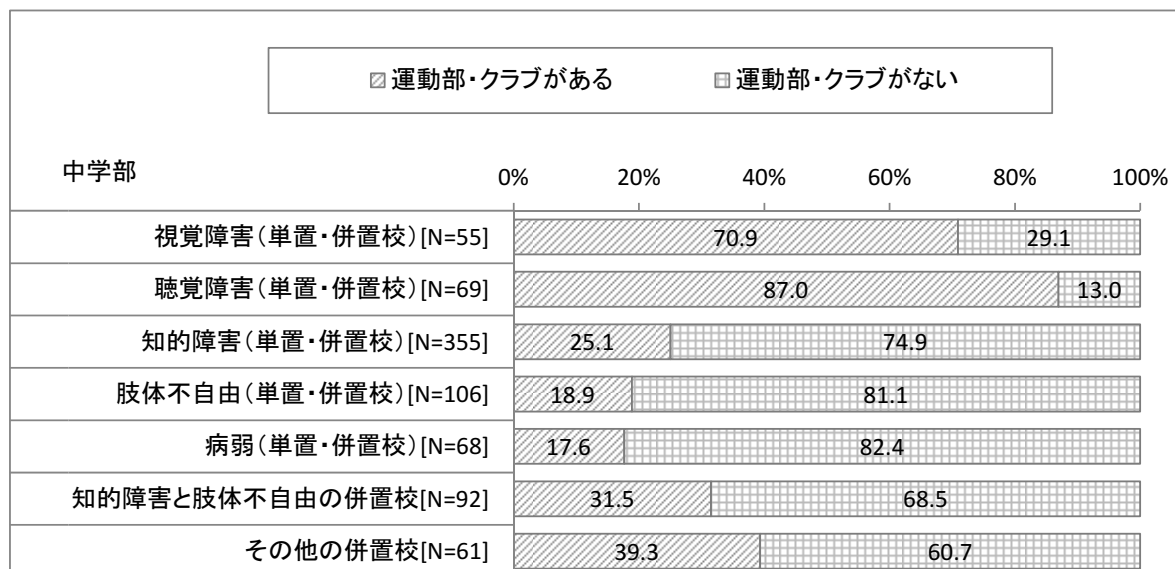


注 1) 有効回答数 876 のうち、学部ごとに運動部・クラブの質問に回答した学校を対象に集計。

注 2) 視覚障害(単置・併置校): 単置校と併置校を合わせた、視覚障害の学校種における運動部・クラブの有無。他の障害種についても同様。

注 3) 知的障害と肢体不自由の併置校: 知的障害と肢体不自由合同の活動、障害種別に分かれての活動、およびいずれかひとつの障害種での活動の有無。その他の併置校についても同様。

図表 2-14 運動部・クラブの有無(中学部・障害種別)

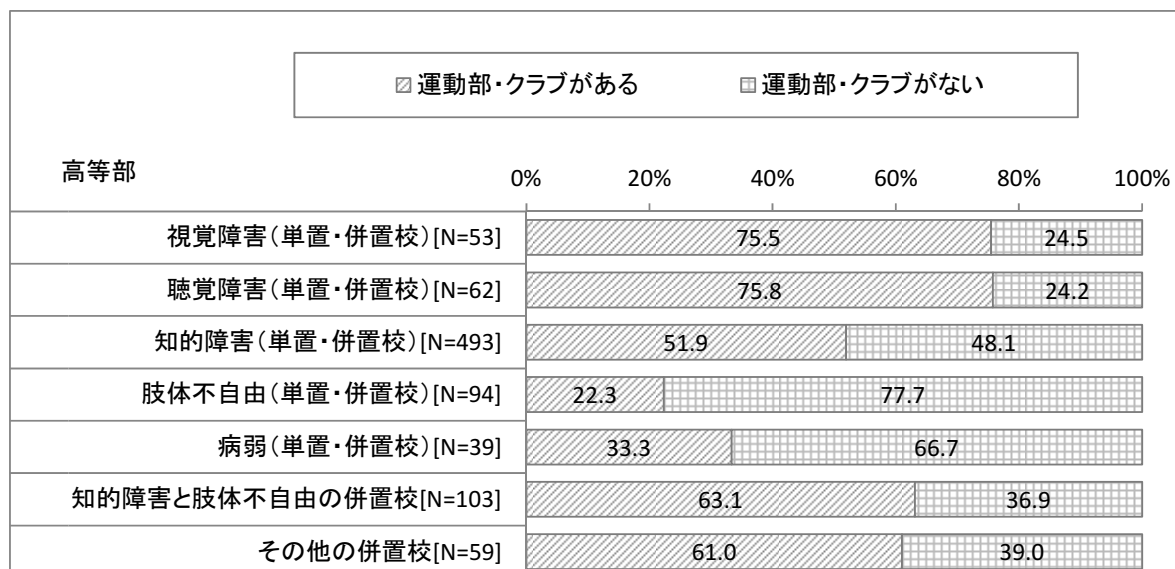


注 1) 有効回答数 876 のうち、学部ごとに運動部・クラブの質問に回答した学校を対象に集計。

注 2) 視覚障害(単置・併置校): 単置校と併置校を合わせた、視覚障害の学校種における運動部・クラブの有無。他の障害種についても同様。

注 3) 知的障害と肢体不自由の併置校: 知的障害と肢体不自由合同の活動、障害種別に分かれての活動、およびいずれかひとつの障害種での活動の有無。その他の併置校についても同様。

図表 2-15 運動部・クラブの有無(高等部・障害種別)



注 1) 有効回答数 876 のうち、学部ごとに運動部・クラブの質問に回答した学校を対象に集計。

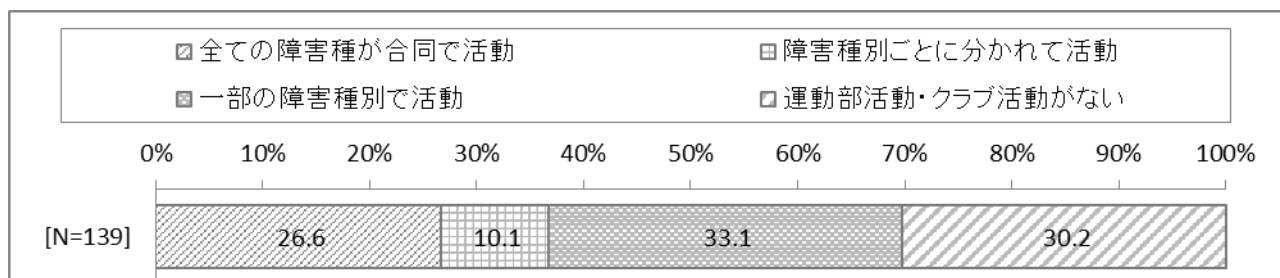
注 2) 視覚障害(単置・併置校): 単置校と併置校を合わせた、視覚障害の学校種における運動部・クラブの有無。他の障害種についても同様。

注 3) 知的障害と肢体不自由の併置校: 知的障害と肢体不自由合同の活動、障害種別に分かれての活動、およびいずれかひとつの障害種での活動の有無。その他の併置校についても同様。

(2) 併置校における運動部活動・クラブ活動の実態

複数の障害種別の幼児児童生徒がいる併置校の運動部活動・クラブ活動についてみると、すべての障害種が合同で活動している学校が 26.6%、障害種別で分かれて活動している学校が 10.1%、一部の障害種別に活動が限定されている学校が 33.1%となっており、併置校で多様な形で運動部活動・クラブ活動が行われていることがわかった(図表 2-16)。

図表 2-16 併置校の運動部活動・クラブ活動の実施状況

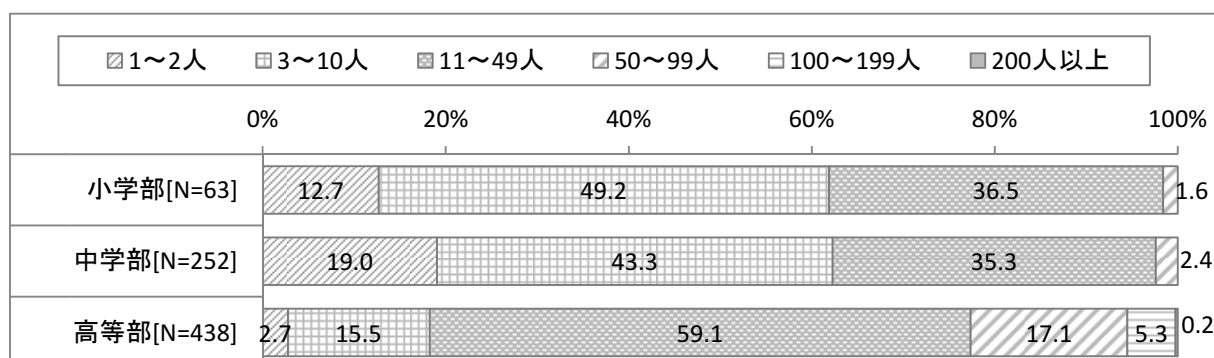


注)有効回答数 161 のうち、部活動・クラブ活動の質問に回答した 139 校による集計。

(3) 運動部活動・クラブ活動の人数

運動部・クラブの人数(延べ人数)は、「小学部」「中学部」では、10 人以下が 6 割を超え、「高等部」では「11～49 人」が約 6 割、50 人以上が約 4 分の 1 であった(図表 2-17)。

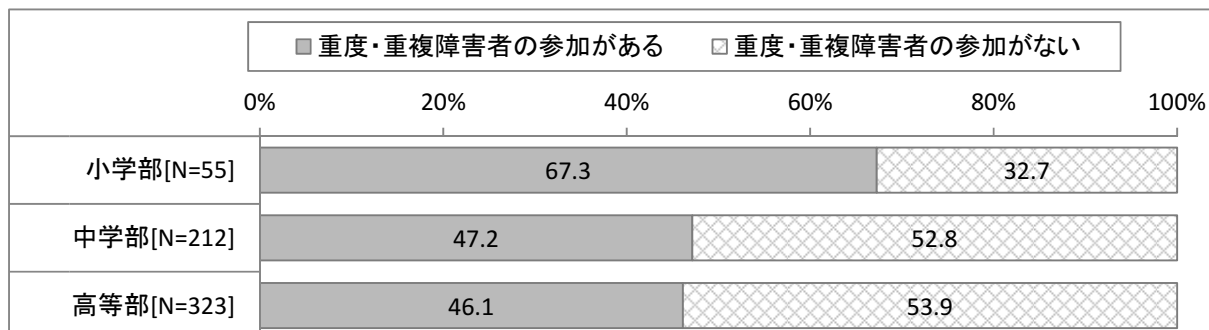
図表 2-17 運動部・クラブの人数(延べ人数)



(4) 運動部活動・クラブ活動への重度・重複障害者の参加

重度・重複障害者の運動部活動・クラブ活動への参加は、「小学部」が 67.3%であったのに対して、「中学部」「高等部」では 5 割以下であった(図表 2-18)。

図表 2-18 重度・重複障害者の参加(重度・重複障害者在籍校のみ)



注) 重度・重複障害者が在籍している学校のうち、部活動・クラブ活動を実施している学校を対象に集計。

(5) 実施種目

運動部活動・クラブ活動の実施種目は、小学部から高等部を通じて、「陸上競技」と「サッカー(ブラインドサッカーを含む)」が多く実施されていた(図表 2-19)。実施種目の上位をみると、「小学部」では、「陸上競技」(23.9%)、「サッカー(ブラインドサッカーを含む)」(22.4%)、「ドッジボール」(19.4%)であった。「中学部」では、「陸上競技」(52.4%)が過半数を占め、次いで「卓球」(30.4%)、「サッカー(ブラインドサッカーを含む)」(25.6%)であった。「高等部」では、「陸上競技」(60.7%)が 6 割を超え、「サッカー(ブラインドサッカーを含む)」(42.9%)、「バスケットボール」(39.5%)も約 4 割で実施していた。

障害種別にみると、「視覚障害のみ」では、「フロアバレーボール」「グラウンドソフトボール」「サウンドテーブルテニス」など、視覚障害者用の種目が上位を占めた(図表 2-20)。同様に、「肢体不自由のみ」では、「ボッチャ」「ハンドサッカー」が上位種目となった(図表 2-23)。

一般校における実施種目の上位をみると、中学校における種目別の学校数・加盟校数(公益財団法人日本中学校体育連盟・2013 年度加盟校調査集計)では、男子は 1 位「軟式野球」、2 位「バスケットボール」、3 位「サッカー」、4 位「卓球」、5 位「陸上競技」、女子は 1 位「バレーボール」、2 位「バスケットボール」、3 位「ソフトテニス」、4 位「陸上競技」、5 位「卓球」であった。高校における種目別の学校数・加盟校数(公益財団法人全国高等学校体育連盟・2013 年度加盟登録状況/公益財団法人日本高等学校野球連盟・2013 年度加盟校数)では、男子は 1 位「バスケットボール」、2 位「陸上競技」、3 位「卓球」、4 位「サッカー」、5 位「硬式野球」、女子は 1 位「バレーボール」、2 位「バスケットボール」、3 位「陸上競技」、4 位「バドミントン」、5 位「卓球」であった。中学、高校で実施される上位種目には、一般校との差はほとんどみられなかった。

図表 2-19 運動部活動・クラブ活動の実施種目(複数回答)

(%)

順位	小学部[N=67]		中学部[N=273]		高等部[N=478]	
1位	陸上競技	23.9	陸上競技	52.4	陸上競技	60.7
2位	サッカー (ブラインドサッカーを含む)	22.4	卓球	30.4	サッカー (ブラインドサッカーを含む)	42.9
3位	ドッジボール	19.4	サッカー (ブラインドサッカーを含む)	25.6	バスケットボール	39.5
4位	バドミントン	13.4	バスケットボール	17.6	卓球	33.9
5位	野球 (ティーボールを含む)		フライングディスク	16.1	フライングディスク	19.9
6位	卓球	11.9	野球 (ティーボールを含む)	11.7	バドミントン	17.8
7位	フライングディスク	10.4	バドミントン	11.4	ソフトボール	14.4
8位	ポッチャ	9.0	フロアバレーボール	10.3	野球 (ティーボールを含む)	11.7
9位	サウンドテーブルテニス	7.5	水泳	8.8	バレーボール (ソフトバレーを含む)	11.1
10位	バレーボール (ソフトバレーを含む)		バレーボール (ソフトバレーを含む)	8.1	水泳	9.6
11位	フットベースボール		グラウンドソフトボール	7.7	フットベースボール	9.2
12位	トランポリン		サウンドテーブルテニス	7.3	フロアバレーボール	6.7
13位	ハンドサッカー	6.0	フットベースボール	6.6	ポッチャ	6.1
14位	グラウンドソフトボール	4.5	ソフトボール	5.1	グラウンドソフトボール	5.9
15位	バスケットボール		ポッチャ	5.1	サウンドテーブルテニス	5.0

注) 運動部・クラブがある学校のうち、実施種目の質問に回答した学校を対象に集計。

図表 2-20 運動部活動・クラブ活動の実施種目(視覚障害のみ・複数回答)

(%)

	小学部[N=8]	中学部[N=41]	高等部[N=41]
フロアバレーボール	12.5	63.4	73.2
グランドソフトボール	37.5	48.8	68.3
サウンドテーブルテニス	62.5	48.8	56.1
陸上競技	62.5	39.0	48.8
柔道	12.5	7.3	22.0
水泳	0.0	19.5	19.5
ゴールボール	12.5	17.1	17.1
卓球	0.0	9.8	17.1
野球(ティーボールを含む)	0.0	0.0	2.4
サッカー(ブラインドサッカーを含む)	25.0	4.9	0.0
フライングディスク	0.0	2.4	0.0

図表 2-21 運動部活動・クラブ活動の実施種目(聴覚障害のみ・複数回答)

(%)

	小学部[N=21]	中学部[N=63]	高等部[N=49]
陸上競技	19.0	65.1	89.8
卓球	23.8	71.4	83.7
バレーボール(ソフトバレーを含む)	9.5	25.4	34.7
野球(ティーボールを含む)	4.8	15.9	24.5
バドミントン	33.3	17.5	20.4
サッカー(ブラインドサッカーを含む)	28.6	7.9	8.2
バスケットボール	4.8	3.2	8.2
テニス	0.0	3.2	8.2
水泳	9.5	3.2	4.1
フライングディスク	0.0	3.2	4.1
ドッジボール	33.3	0.0	0.0
ソフトボール	9.5	0.0	0.0
フットベースボール	9.5	0.0	0.0

図表 2-22 運動部活動・クラブ活動の実施種目(知的障害のみ・複数回答)

(%)

	小学部[N=16]	中学部[N=106]	高等部[N=294]
陸上競技	25.0	52.8	61.9
サッカー(ブラインドサッカーを含む)	25.0	47.2	59.5
バスケットボール	0.0	31.1	56.1
卓球	0.0	18.9	31.0
フライングディスク	31.3	25.5	23.5
バドミントン	0.0	11.3	19.7
ソフトボール	0.0	8.5	19.4
フットベースボール	6.3	13.2	12.6
バレーボール(ソフトバレーを含む)	0.0	1.9	10.2
野球(ティーボールを含む)	18.8	9.4	9.5
水泳	0.0	11.3	9.2
ドッジボール	6.3	7.5	4.8
ポッチャ	0.0	1.9	4.1
グラウンド・ゴルフ	6.3	6.6	3.7
テニス	0.0	0.9	3.7
剣道	0.0	0.9	1.0
卓球/バレー	0.0	0.0	1.0
ハンドサッカー	0.0	0.9	0.7
柔道	0.0	0.0	0.3
グランドソフトボール	0.0	0.9	0.0

図表 2-23 運動部活動・クラブ活動の実施種目(肢体不自由のみ・複数回答)

(%)

	小学部[N=11]	中学部[N=21]	高等部[N=26]
陸上競技	18.2	66.7	65.4
ポッチャ	45.5	52.4	53.8
ハンドサッカー	36.4	52.4	50.0
フライングディスク	9.1	28.6	30.8
野球(ティーボールを含む)	27.3	23.8	15.4
卓球バレー	9.1	9.5	11.5
水泳	0.0	4.8	11.5
バレーボール(ソフトバレーを含む)	18.2	9.5	3.8
アーチェリー	9.1	4.8	3.8
サッカー(ブラインドサッカーを含む)	9.1	4.8	3.8
卓球	9.1	4.8	3.8
バスケットボール	9.1	4.8	3.8
グラウンド・ゴルフ	0.0	4.8	3.8
車椅子バスケットボール	0.0	4.8	3.8
フットベースボール	0.0	4.8	3.8
フロアバレーボール	0.0	4.8	3.8
バドミントン	0.0	0.0	3.8
ドッジボール	9.1	0.0	0.0

図表 2-24 運動部活動・クラブ活動の実施種目(病弱のみ・複数回答)

(%)

	小学部[N=6]	中学部[N=12]	高等部[N=14]
バドミントン	33.3	41.7	50.0
バスケットボール	16.7	41.7	42.9
フライングディスク	16.7	33.3	28.6
サッカー(ブラインドサッカーを含む)	33.3	16.7	28.6
卓球	33.3	33.3	21.4
野球(ティーボールを含む)	33.3	16.7	21.4
バレーボール(ソフトバレーを含む)	0.0	16.7	21.4
陸上競技	0.0	25.0	7.1
ドッジボール	50.0	8.3	7.1
フロアバレーボール	0.0	8.3	7.1
フットベースボール	0.0	0.0	7.1
ポッチャ	0.0	0.0	7.1

図表 2-25 運動部活動・クラブ活動の実施種目(知的障害と肢体不自由が合同・複数回答)

(%)

	小学部[N=5]	中学部[N=24]	高等部[N=48]
陸上競技	20.0	37.5	37.5
サッカー(ブラインドサッカーを含む)	0.0	20.8	29.2
卓球	0.0	12.5	22.9
フライングディスク	0.0	8.3	18.8
ソフトボール	0.0	4.2	14.6
野球(ティーボールを含む)	0.0	12.5	12.5
卓球バレー	0.0	8.3	12.5
バスケットボール	0.0	8.3	12.5
フットベースボール	20.0	8.3	8.3
水泳	0.0	4.2	8.3
バドミントン	0.0	0.0	6.3
グラウンド・ゴルフ	0.0	8.3	4.2
ドッジボール	20.0	4.2	2.1
剣道	0.0	4.2	2.1
ポッチャ	0.0	4.2	2.1
バレーボール(ソフトバレーを含む)	20.0	0.0	2.1
テニス	0.0	0.0	2.1

図表 2-26 運動部活動・クラブ活動の実施種目(その他複数の障害種が合同・複数回答)

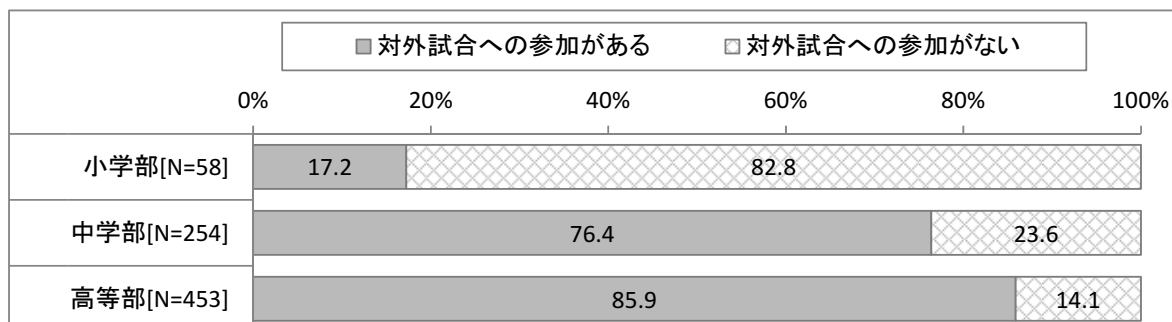
(%)

	小学部[N=1]	中学部[N=13]	高等部[N=18]
卓球	0.0	46.2	44.4
陸上競技	0.0	30.8	44.4
サッカー(ブラインドサッカーを含む)	0.0	38.5	38.9
バスケットボール	0.0	38.5	38.9
バドミントン	0.0	23.1	33.3
ソフトボール	0.0	30.8	27.8
フライングディスク	0.0	15.4	16.7
車椅子バスケットボール	0.0	15.4	11.1
野球(ティーボールを含む)	0.0	15.4	11.1
卓球バレー	0.0	7.7	11.1
水泳	0.0	0.0	11.1
フットベースボール	100.0	7.7	5.6
テニス	0.0	7.7	5.6
ポッチャ	100.0	0.0	5.6
サウンドテーブルテニス	0.0	0.0	5.6
バレーボール(ソフトバレーを含む)	0.0	0.0	5.6

(6) 対外試合への参加

運動部活動・クラブ活動の対外試合への参加率は、「小学部」が 17.2%、「中学部」が 76.4%、「高等部」が 85.9%と、年代が上がるにつれて高くなっている(図表 2-27)。障害種別にみると、「視覚障害のみ」「聴覚障害のみ」では、「中学部」から対外試合への参加が 9 割を超えており、「知的障害のみ」も、「高等部」で 9 割を超えていた(図表 2-28)。

図表 2-27 運動部活動・クラブ活動の対外試合への参加状況



注)運動部・クラブがある学校のうち、対外試合への参加状況の質問に回答した学校を対象に集計。

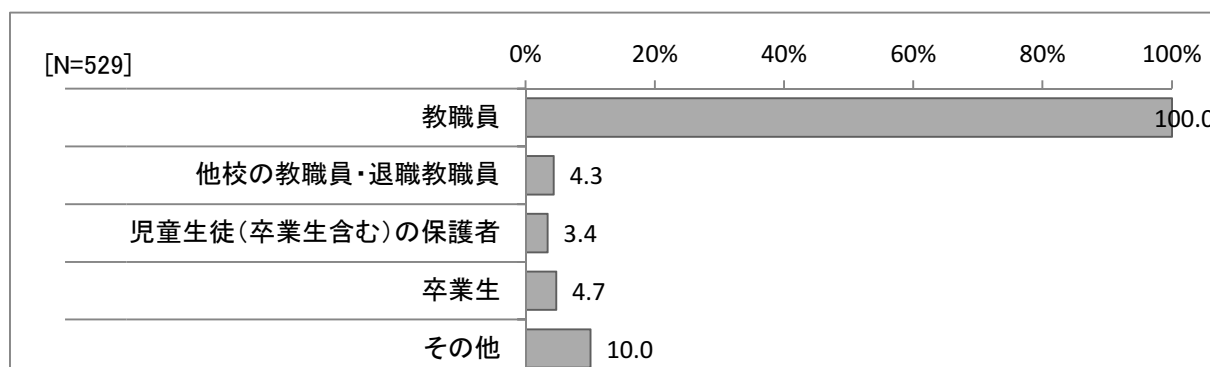
図表 2-28 運動部活動・クラブ活動の対外試合への参加(障害種別)

障害種別	小学部		中学部		高等部	
	N	参加率(%)	N	参加率(%)	N	参加率(%)
視覚障害のみ	8	50.0	33	93.9	35	94.3
聴覚障害のみ	14	21.4	59	96.6	46	97.8
知的障害のみ	12	8.3	78	70.5	235	91.5
肢体不自由のみ	10	10.0	20	65.0	21	81.0
病弱のみ	5	0.0	12	33.3	12	41.7
知的障害と肢体不自由が合同	7	14.3	30	63.3	70	72.9
その他複数の障害種が合同	2	0.0	22	68.2	34	67.6

(7) 指導者、サポートスタッフ

運動部活動・クラブ活動の指導者、サポートスタッフとして、すべての学校が「教職員」と回答した。「その他」(10.0%)の大部分は、外部指導者であった(図表 2-29)。

図表 2-29 運動部活動・クラブ活動の指導者、サポートスタッフ(複数回答)

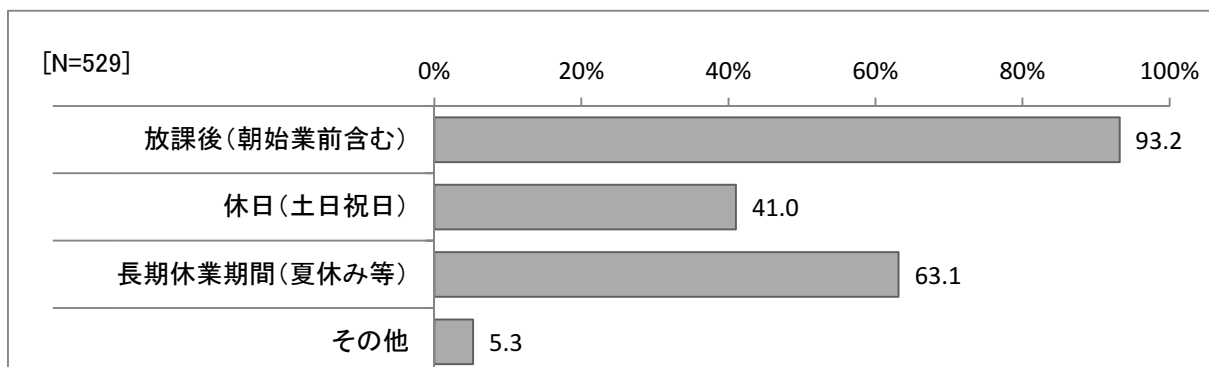


注)運動部・クラブがある学校のうち、指導者、サポートスタッフの質問に回答した 529 校を対象に集計。

(8) 活動時間

運動部活動・クラブ活動の活動時間は、「放課後(朝始業前含む)」が 93.2%、「長期休業期間(夏休み等)」が 63.1%、「休日(土日祝日)」が 41.0%であった(図表 2-30)。障害種別にみると、「肢体不自由(単置)」を除く全ての障害種で、「放課後(朝始業前含む)」が約 9 割であった(図表 2-31)。また、「聴覚障害(単置)」では、どの活動時間においても、他と比べて実施の割合が高かった。

図表 2-30 運動部活動・クラブ活動の活動時間(複数回答)



注)運動部・クラブがある学校のうち、活動時間の質問に回答した 529 校を対象に集計。

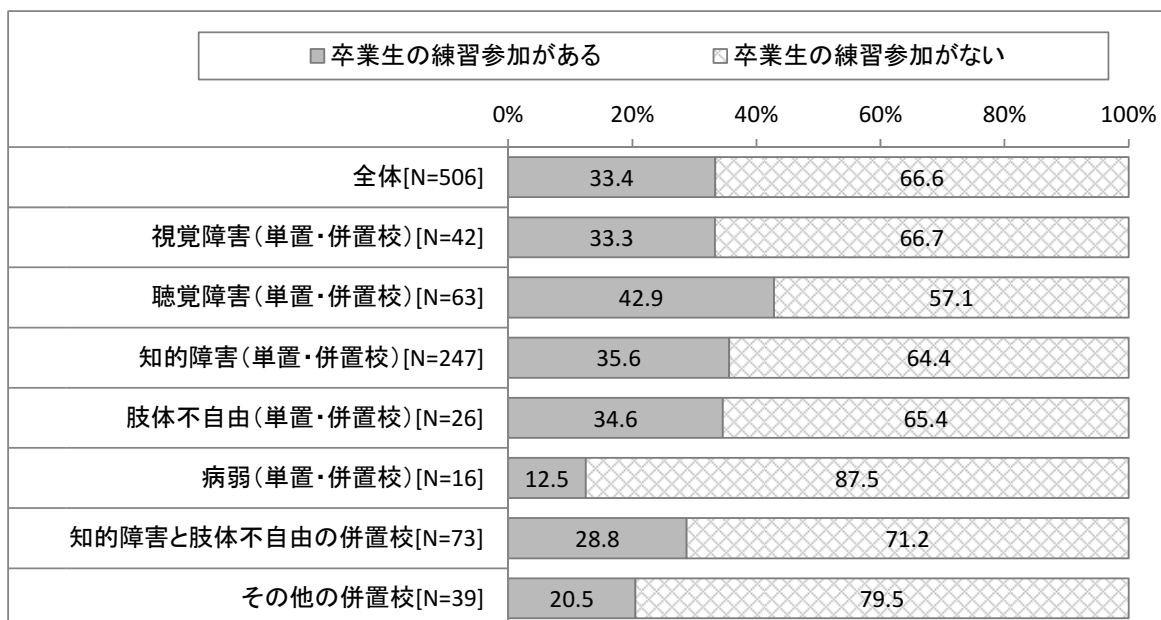
図表 2-31 運動部活動・クラブ活動の活動時間(障害種別・複数回答)

	(%)						
	視覚障害 (単置)	聴覚障害 (単置)	知的障害 (単置)	肢体不自由 (単置)	病弱 (単置)	知的障害 + 肢体不自由 (併置)	その他の複数障害 (併置)
	N=44	N=66	N=258	N=27	N=16	N=77	N=39
放課後(朝始業前含む)	97.7	97.0	94.6	59.3	100.0	92.2	100.0
休日(土日祝日)	29.5	72.7	41.9	48.1	0.0	31.2	28.2
長期休業期間(夏休み等)	43.2	86.4	71.7	25.9	25.0	48.1	64.1
その他	4.5	6.1	4.3	22.2	0.0	3.9	5.1

(9) 卒業生の練習参加

運動部活動・クラブ活動の卒業生の練習参加は、全体が約3割であった(図表2-32)。障害種別にみると、「聴覚障害のみ」が4割を超えていた。特別支援学校の運動部活動・クラブ活動が、卒業生の運動・スポーツ活動の場にもなっていることがわかった。

図表 2-32 運動部活動・クラブ活動における卒業生の練習参加状況



注 1)有効回答数 876 のうち、学部ごとに運動部・クラブの質問に回答した学校を対象に集計。

注 2)視覚障害(単置・併置校):単置校と併置校を合わせた、視覚障害の学校種における運動部・クラブの有無。他の障害種についても同様。

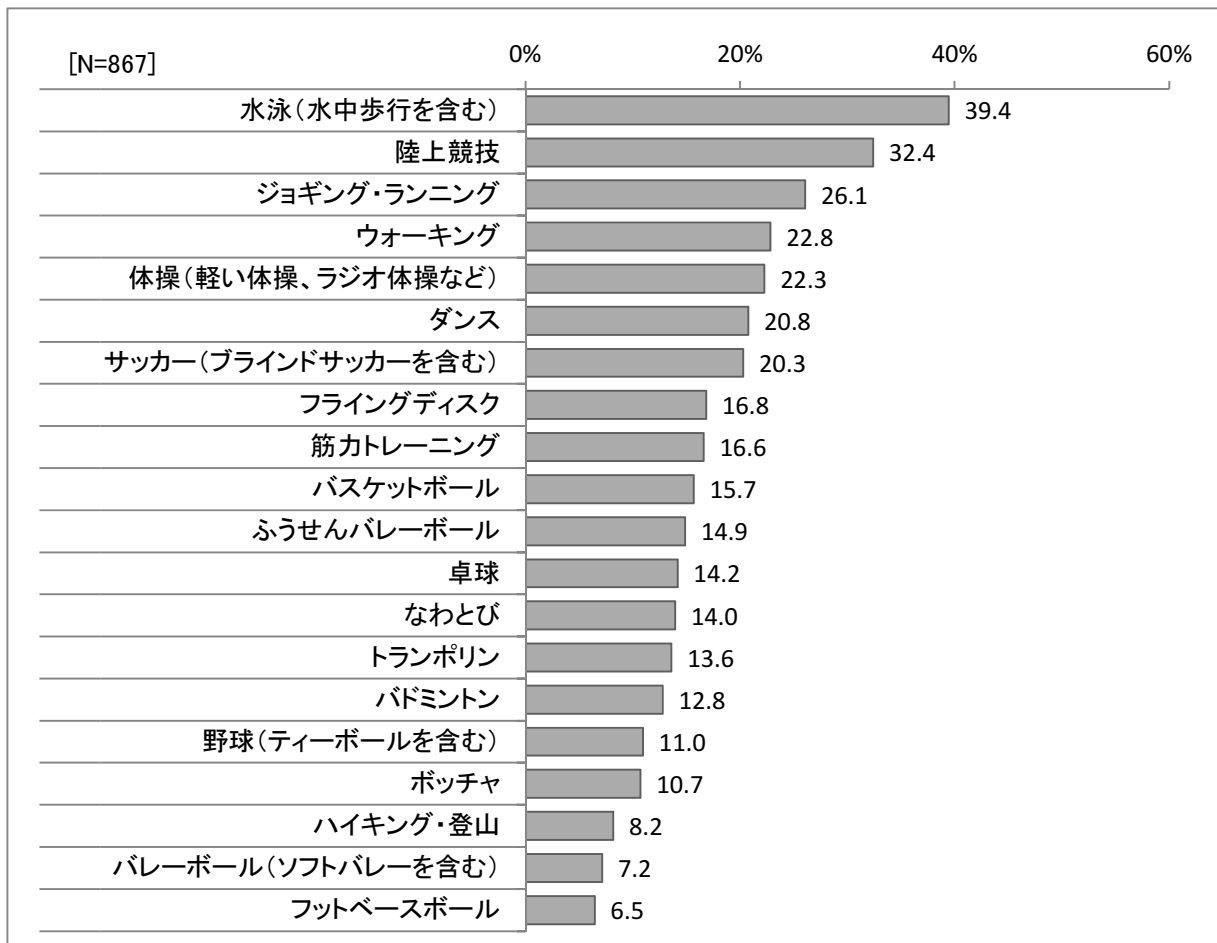
注 3)知的障害と肢体不自由の併置校:知的障害と肢体不自由合同の活動、障害種別に分かれての活動、およびいずれかひとつの障害種での活動の有無。その他の併置校についても同様。

2. 4 体育の授業、運動部活動・クラブ活動以外に行っているスポーツ

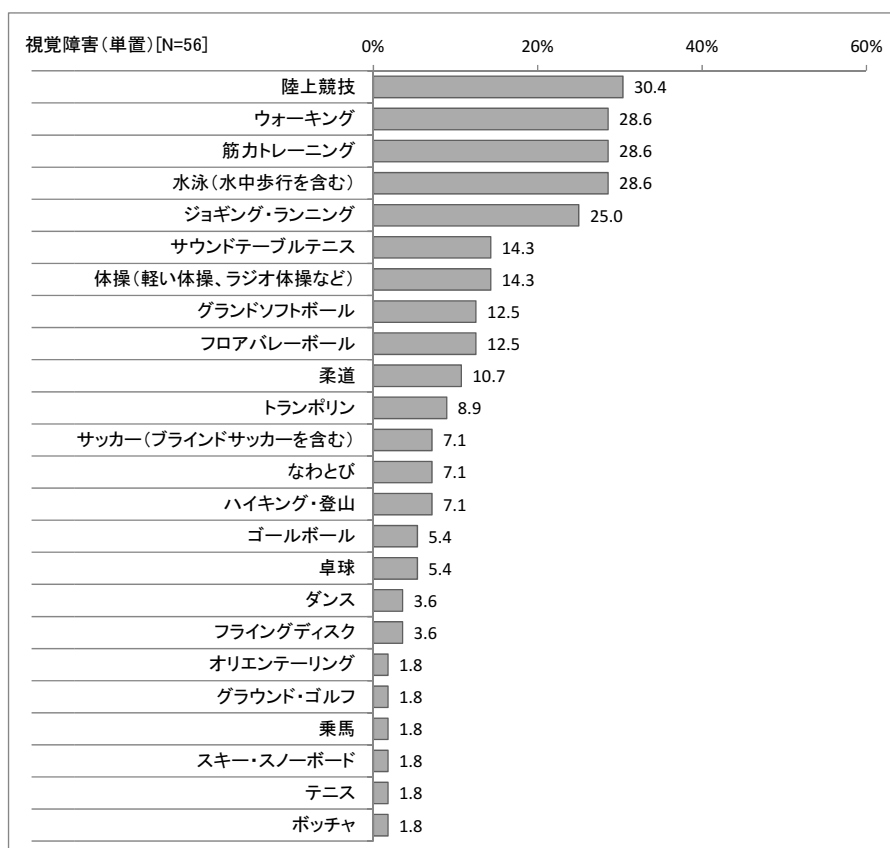
体育の授業や運動部活動・クラブ活動以外で幼児児童生徒が行っている運動・スポーツは、「水泳(水中歩行を含む)」(39.4%)が最も多く、次いで「陸上競技」(32.4%)、「ジョギング・ランニング」(26.1%)、「ウォーキング」(22.8%)、「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」(22.3%)であった(図表 2-33)。

障害種別にみると、「視覚障害(単置)」では、「サウンドテーブルテニス」(14.3%)、「グランドソフトボール」(12.5%)、「フロアバレーボール」(12.5%)など、視覚障害者用の種目が上位に挙げられた(図表 2-34)。同様に、「肢体不自由(単置)」では、「ふうせんバレーボール」(29.1%)、「ボッチャ」(25.2%)が、「病弱(単置)」では、「バドミントン」(21.9%)が上位種目となった(図表 2-37、図表 2-38)。

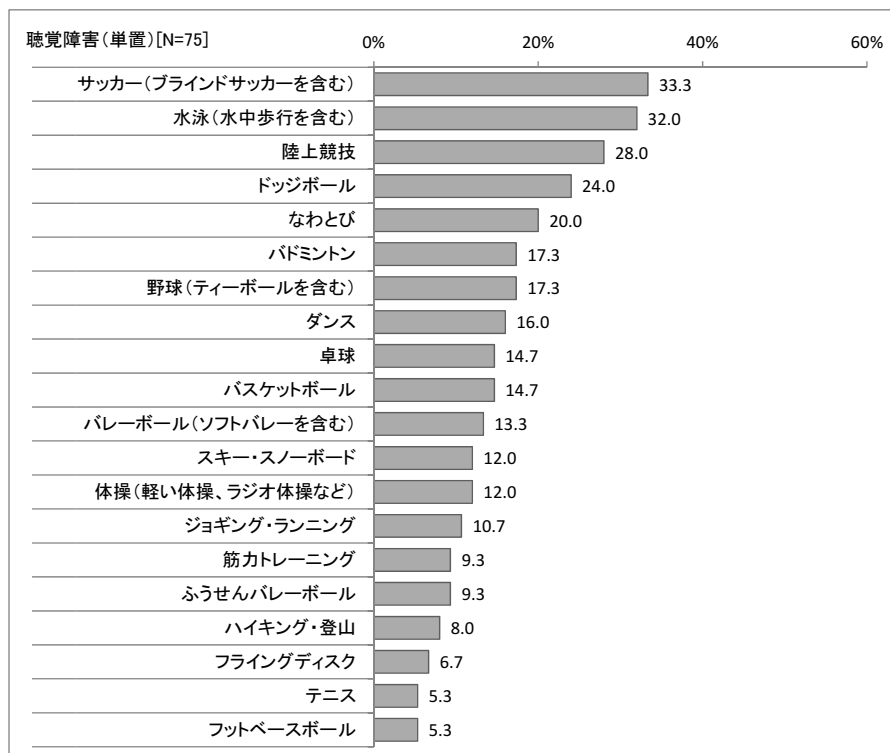
図表 2-33 体育の授業や運動部活動・クラブ活動以外に行っているスポーツ(複数回答・上位 20 種目)



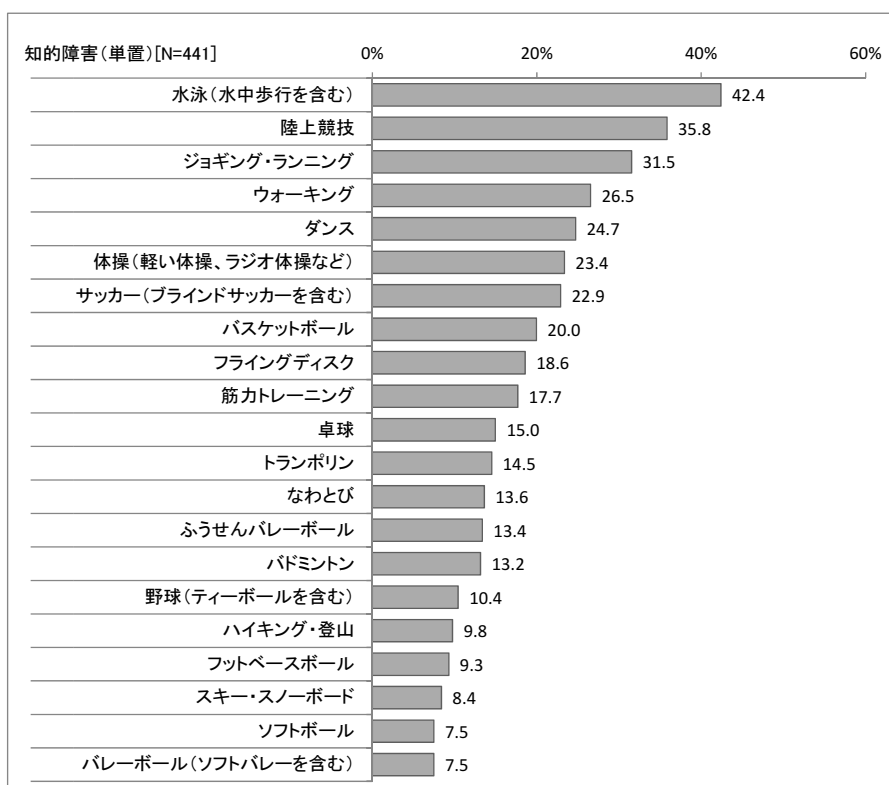
図表 2-34 体育の授業や運動部活動・クラブ活動以外に行っているスポーツ
(視覚障害(単置)・上位 20 種目)



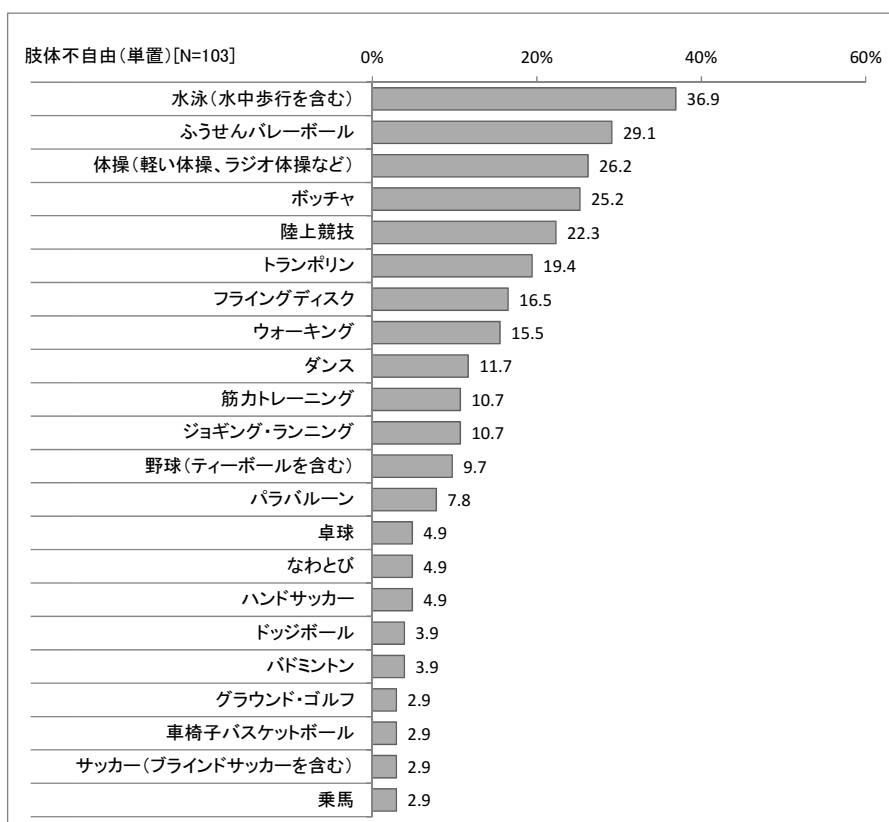
図表 2-35 体育の授業や運動部活動・クラブ活動以外に行っているスポーツ
(聴覚障害(単置)・上位 20 種目)



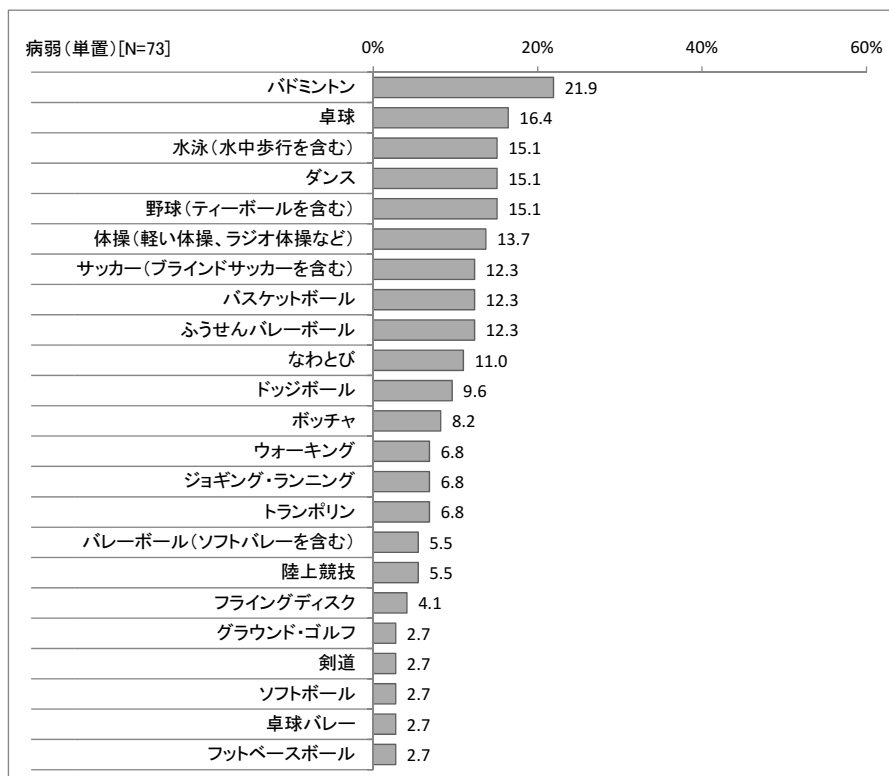
図表 2-36 体育の授業や運動部活動・クラブ活動以外に行っているスポーツ
(知的障害(単置)・上位 20 種目)



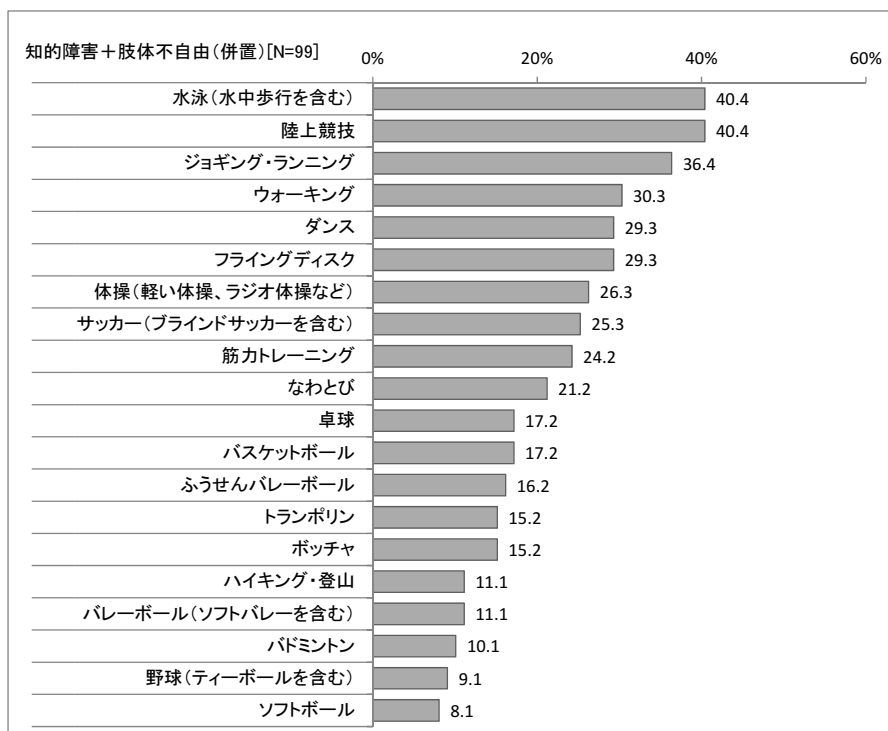
図表 2-37 体育の授業や運動部活動・クラブ活動以外に行っているスポーツ
(肢体不自由(単置)・上位 20 種目)



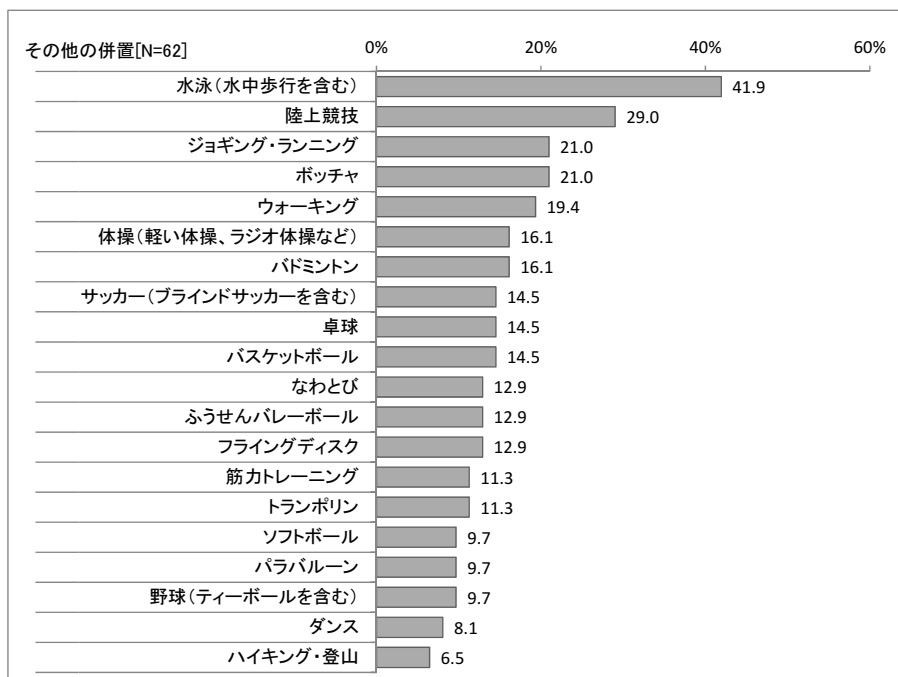
図表 2-38 体育の授業や運動部活動・クラブ活動以外に行っているスポーツ
(病弱(単置)・上位 20 種目)



図表 2-39 体育の授業や運動部活動・クラブ活動以外に行っているスポーツ
(知的障害+肢体不自由(併置)・上位 20 種目)



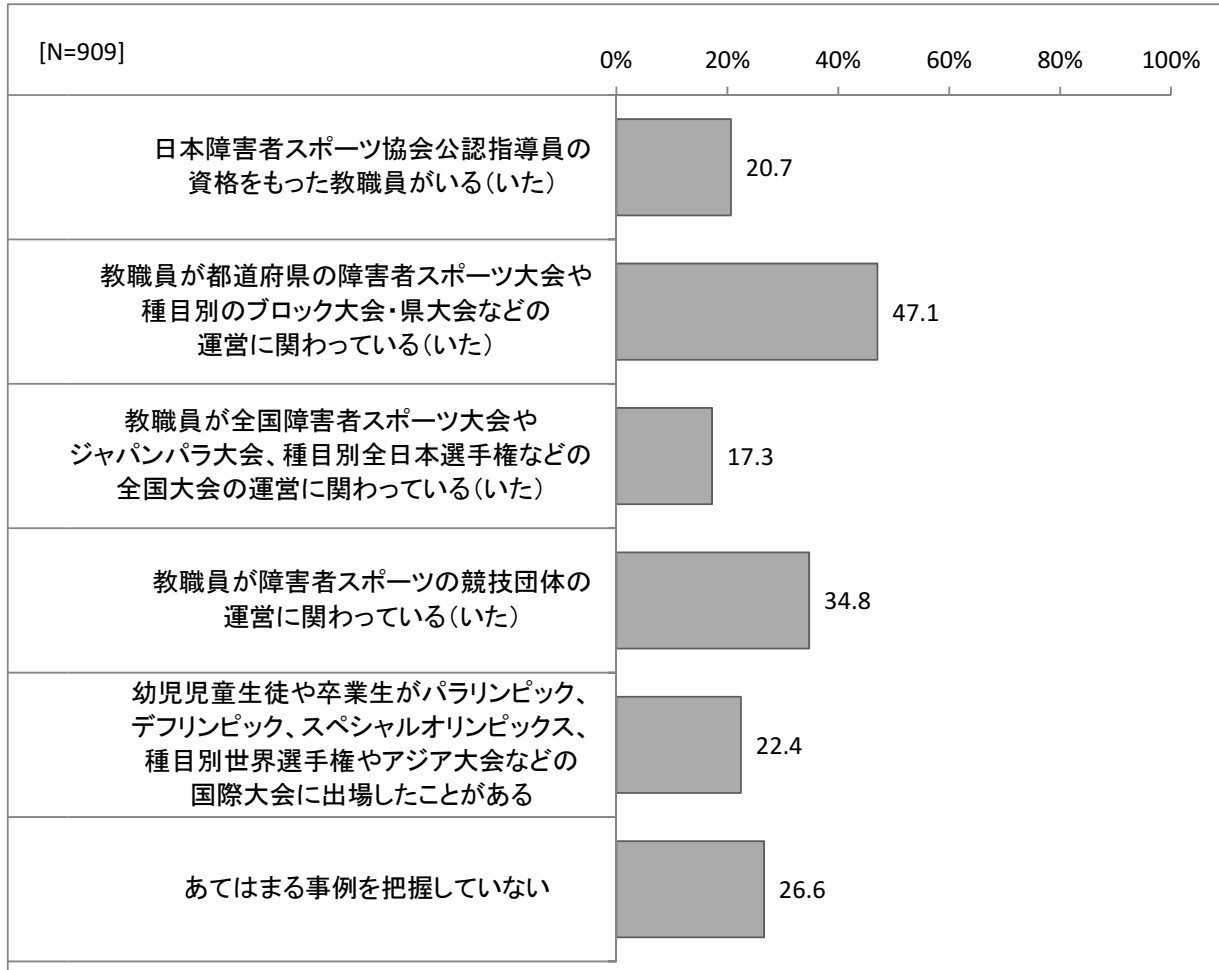
図表 2-40 体育の授業や運動部活動・クラブ活動以外に行っているスポーツ
(その他の複数障害(併置)・上位 20 種目)



2. 5 教職員や幼児児童生徒と障害者スポーツとの関わり

教職員や幼児児童生徒と障害者スポーツとの関わりについてみると、「教職員が都道府県の障害者スポーツ大会や種目別のブロック大会・県大会などの運営に関わっている(いた)」が約 5 割、「教職員が障害者スポーツの競技団体の運営に関わっている(いた)」が約 3 割であった(図表 2-41)。

図表 2-41 教職員や幼児児童生徒と障害者スポーツとの関わり(複数回答)



障害種別にみると、「視覚障害(単置)」「聴覚障害(単置)」において、教職員や幼児児童生徒と障害者スポーツとの関わりについて、「幼児児童生徒や卒業生がパラリンピック、デフリンピック、スペシャルオリンピックス、種目別世界選手権やアジア大会などの国際大会に出場したことがある」が半数を超えていた(図表 2-42)。

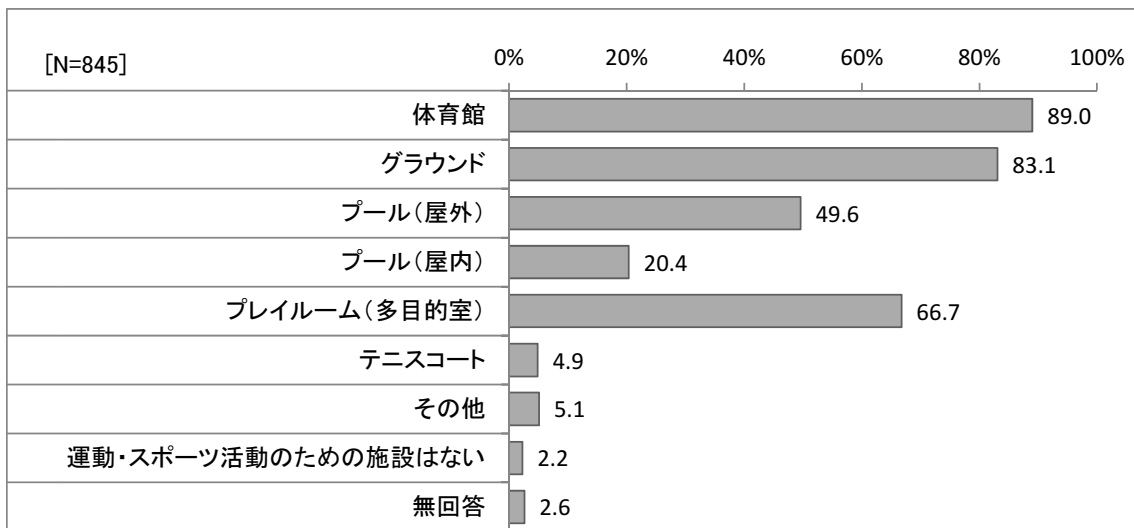
図表 2-42 教職員や幼児児童生徒と障害者スポーツとの関わり(障害種別・複数回答)

	(%)						
	視覚障害 (単置)	聴覚障害 (単置)	知的障害 (単置)	肢体不自由 (単置)	病弱 (単置)	知的障害＋肢体不自由 (併置)	その他の複数障害 (併置)
	N=56	N=75	N=441	N=103	N=73	N=99	N=62
日本障害者スポーツ協会公認指導員の資格をもった教職員がいる(いた)	26.8	13.3	20.0	24.3	9.6	31.3	19.4
教職員が都道府県の障害者スポーツ大会や種目別のブロック大会・県大会などの運営に関わっている(いた)	51.8	42.7	52.6	38.8	23.3	54.5	38.7
教職員が全国障害者スポーツ大会やジャパンパラ大会、種目別全日本選手権などの全国大会の運営に関わっている(いた)	23.2	25.3	16.8	16.5	6.8	16.2	21.0
教職員が障害者スポーツの競技団体の運営に関わっている(いた)	41.1	37.3	38.8	26.2	13.7	39.4	29.0
幼児児童生徒や卒業生がパラリンピック、デフリンピック、スペシャルオリンピックス、種目別世界選手権やアジア大会などの国際大会に出場したことがある	53.6	58.7	21.1	6.8	1.4	16.2	21.0
あてはまる事例を把握していない	14.3	18.7	24.5	39.8	41.1	23.2	29.0

2. 6 運動・スポーツ活動のための施設

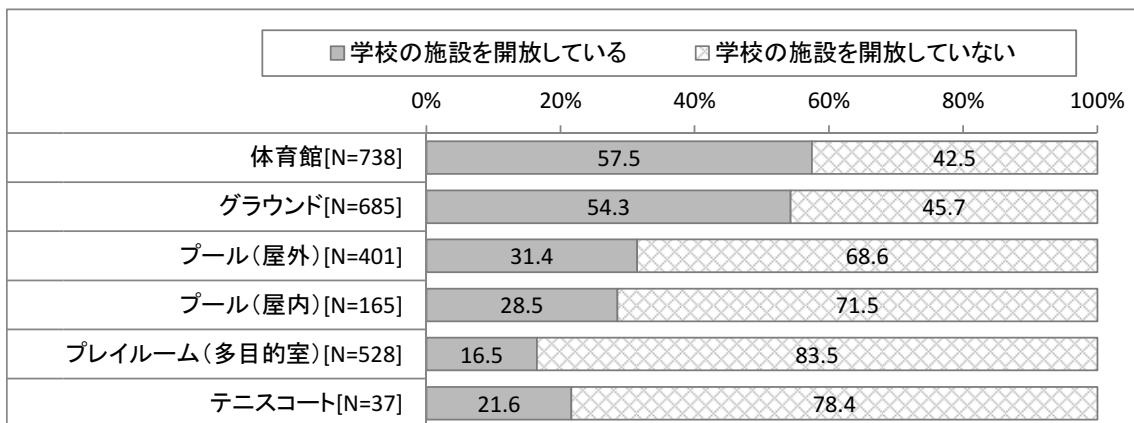
運動・スポーツ活動のための施設は、「体育館」(89.0%)が最も多く、次いで「グラウンド」(83.1%)、「プレイルーム(多目的室)」(66.7%)であった(図表 2-43)。「その他」(5.1%)はトレーニングルーム、柔剣道場(柔道場、剣道場を含む)などであった。

図表 2-43 学校にある運動・スポーツ活動のための施設(複数回答)



保有している学校体育施設の開放状況を見ると、「体育館」が 57.5%で最も高く、次いで「グラウンド」(54.3%)、「プール(屋外)」(31.4%)であった(図表 2-44)。

図表 2-44 学校体育施設の自校の幼児児童生徒以外への開放状況

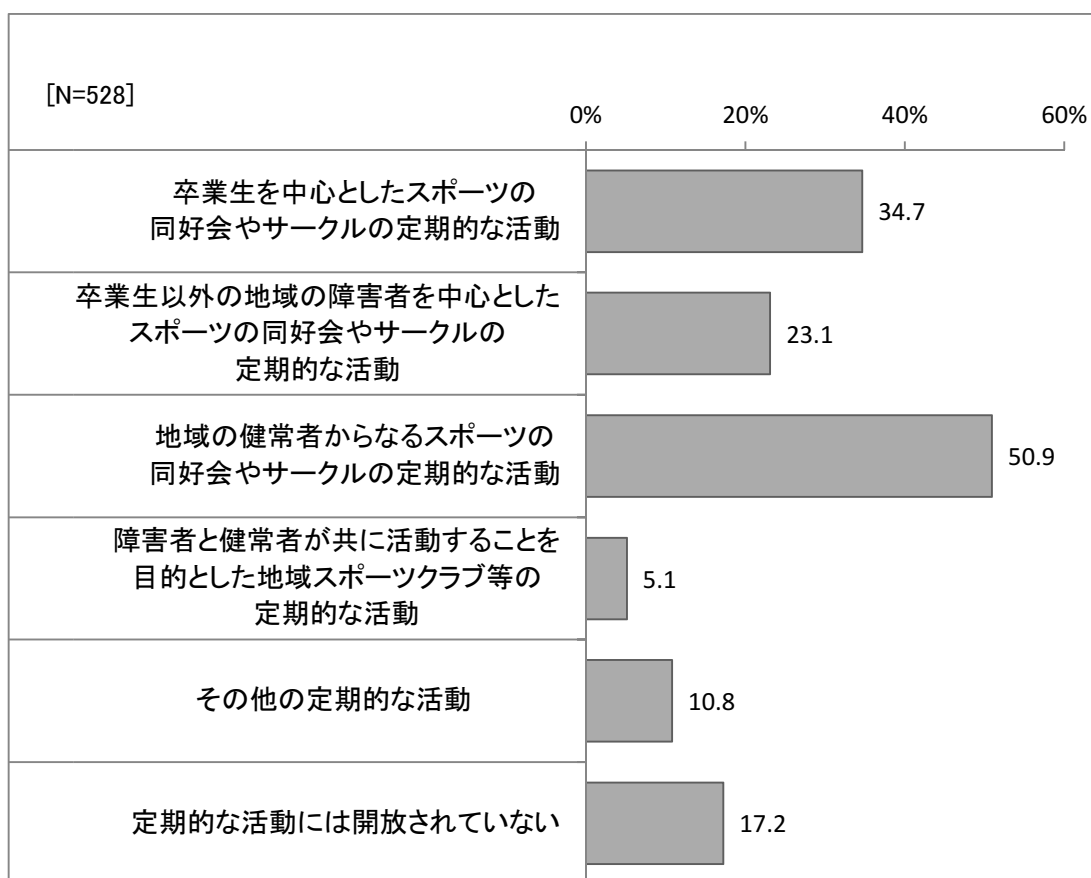


2. 7 学校開放施設で行われている活動

学校開放施設で行われている活動は、「地域の健常者からなるスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」が約 5 割、「卒業生を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」が約 3 割、「卒業生以外の地域の障害者を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」が約 2 割であった(図表 2-45)。また、「その他の定期的な活動」(10.8%)は、PTA 主催のスポーツ活動や隣接する病院や福祉施設の運動・スポーツ活動であった。

なお、『定期的な活動』の中には、生活学習、趣味、スポーツ活動を通じて、生活の充実を図ることを目的とした『青年学級』など、年数回程度の活動も含まれていると推察される。

図表 2-45 学校開放施設で行われている活動(複数回答)



障害種別に学校開放施設で行われている活動についてみると、「視覚障害(単置)」の「卒業生を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」が約6割と積極的に行われていることがわかった(図表2-46)。

図表 2-46 学校開放施設で行われている活動(障害種別)(複数回答)

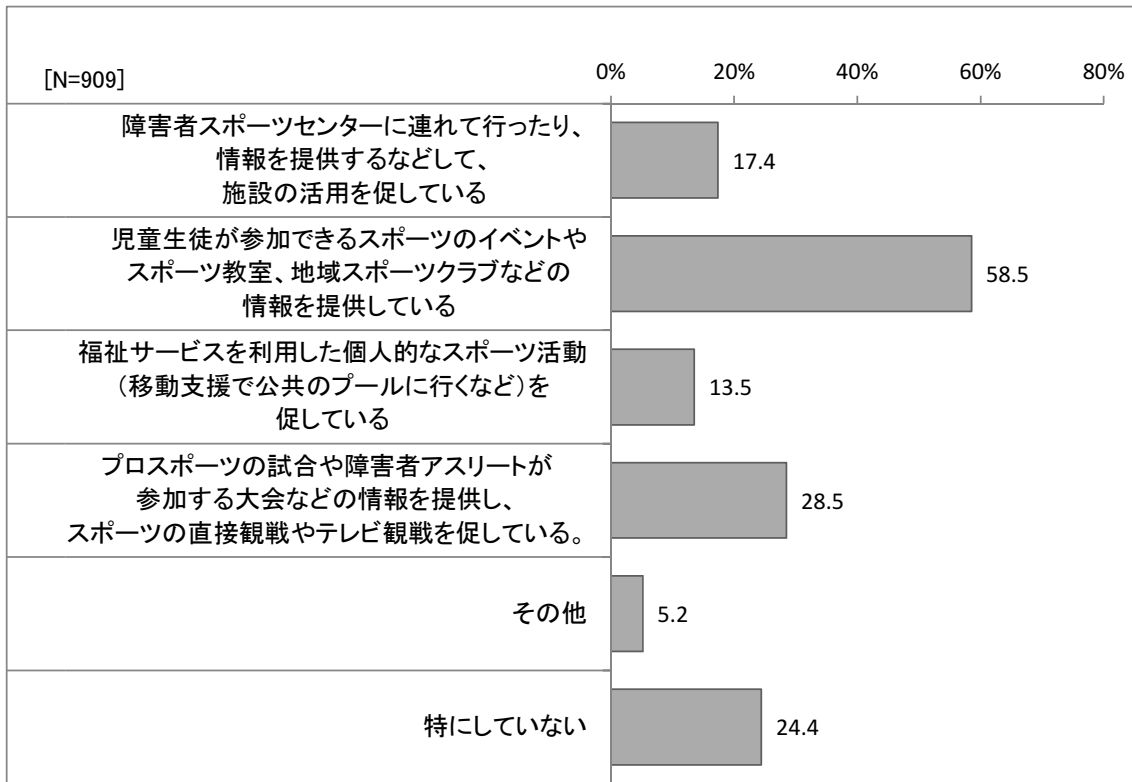
(%)

	視覚障害 (単置)	聴覚障害 (単置)	知的障害 (単置)	肢体不自由 (単置)	病弱 (単置)	知的障害＋肢体不自由 (併置)	その他の複数障害 (併置)
	N=42	N=48	N=264	N=55	N=18	N=61	N=40
卒業生を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動	57.1	33.3	34.1	27.3	11.1	41.0	27.5
卒業生以外の地域の障害者を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動	23.8	25.0	23.9	29.1	11.1	23.0	12.5
地域の健全者からなるスポーツの同好会やサークルの定期的な活動	64.3	66.7	47.7	40.0	61.1	44.3	60.0
障害者と健全者が共に活動することを目的とした地域スポーツクラブ等の定期的な活動	2.4	4.2	5.7	5.5	0.0	9.8	0.0
その他の定期的な活動	0.0	6.3	12.1	12.7	11.1	9.8	17.5
定期的な活動には開放されていない	9.5	14.6	18.6	21.8	11.1	14.8	20.0

2. 8 児童生徒の学外および卒業後の自主的なスポーツ活動の充実につながる配慮

児童生徒の学外および卒業後の自主的なスポーツ活動の充実につながる配慮についてみると、「児童生徒が参加できるスポーツのイベントやスポーツ教室、地域スポーツクラブなどの情報を提供している」が 58.5%で最も多く、「プロスポーツの試合や障害者アスリートが参加する大会などの情報を提供し、スポーツの直接観戦やテレビ観戦を促している」が 28.5%であった(図表 2-47)。「その他」(5.2%)は、プロアスリートとの交流、卒業後を見越したスポーツ活動の充実などであった。また、「特にしていない」も約 4 分の 1 あった。

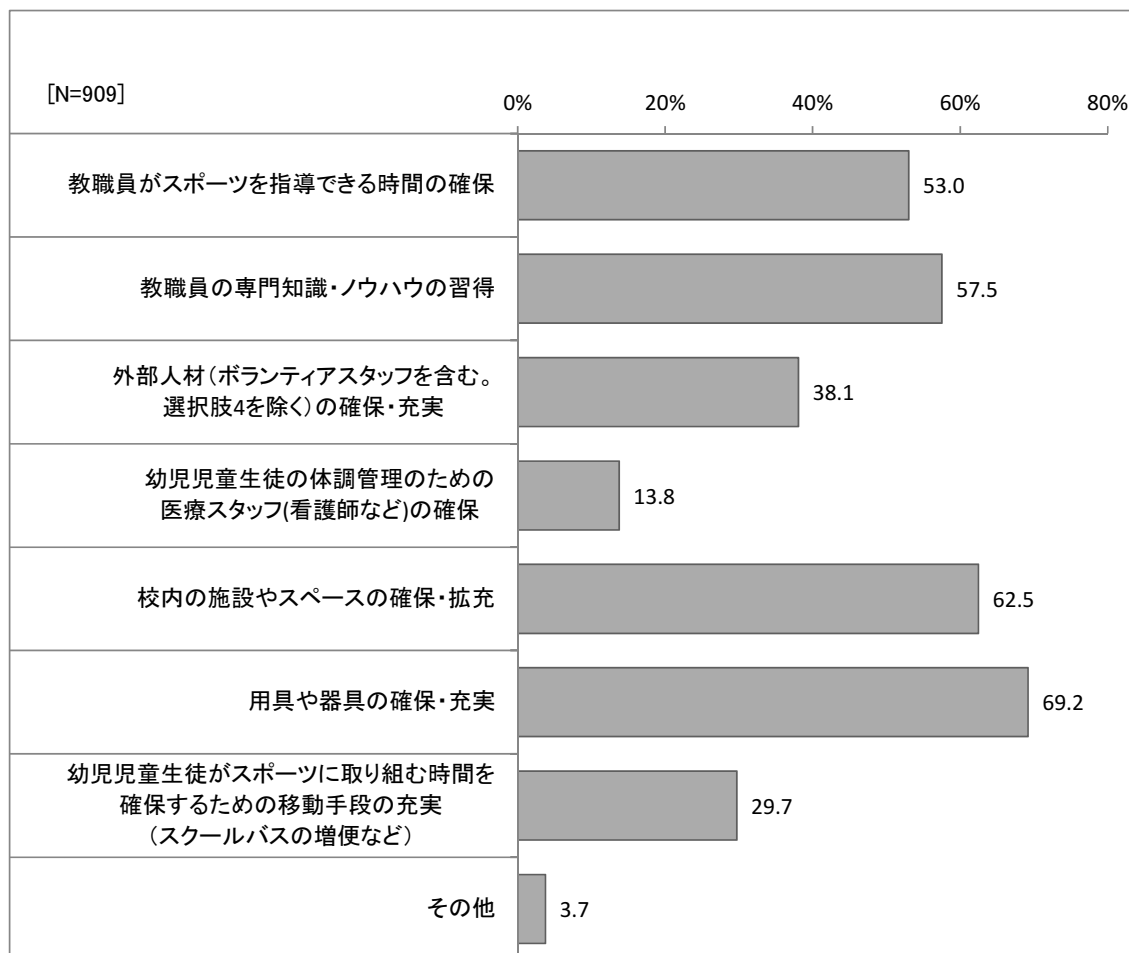
図表 2-47 児童生徒の学外および卒業後の自主的なスポーツ活動の充実につながる配慮
(複数回答)



2.9 スポーツ活動を充実させるための重要な取り組み

幼児児童生徒のスポーツ活動を充実させるための重要な取り組みとしては、「用具や器具の確保・充実」が69.2%と最も多く、次いで「校内の施設やスペースの確保・拡充」(62.5%)、「教職員の専門知識・ノウハウの習得」(57.5%)、「教職員がスポーツを指導できる時間の確保」(53.0%)であった(図表 2-48)。

図表 2-48 スポーツ活動を充実させるための重要な取り組み(複数回答)



障害種別に幼児児童生徒のスポーツ活動を充実させるために重要な取り組みについてみると、「視覚障害(単置)」「聴覚障害(単置)」では、「教職員の専門知識・ノウハウの習得」「用具や器具の確保・充実」が7割以上であった(図表 2-49)。また、「肢体不自由(単置)」では、「幼児児童生徒がスポーツに取り組む時間を確保するための移動手段の充実(スクールバスの増便など)」が約4割、「幼児児童生徒の体調管理のための医療スタッフ(看護師など)の確保」が約3割と、他と比べて割合が高かった。

図表 2-49 スポーツ活動を充実させるために重要な取り組み(複数回答)

	(%)						
	視覚障害 (単置)	聴覚障害 (単置)	知的障害 (単置)	肢体不自由 (単置)	病弱 (単置)	知的障害＋肢体不自由 (併置)	その他の複数障害 (併置)
	N=56	N=75	N=441	N=103	N=73	N=99	N=62
教職員がスポーツを指導できる時間の確保	64.3	70.7	54.4	36.9	28.8	63.6	50.0
教職員の専門知識・ノウハウの習得	75.0	73.3	54.2	58.3	52.1	54.5	56.5
外部人材(ボランティアスタッフを含む。選択肢4を除く)の確保・充実	32.1	42.7	41.0	34.0	20.5	43.4	35.5
幼児児童生徒の体調管理のための医療スタッフ(看護師など)の確保	5.4	5.3	9.8	32.0	21.9	15.2	17.7
校内の施設やスペースの確保・拡充	48.2	53.3	68.9	54.4	56.2	63.6	59.7
用具や器具の確保・充実	71.4	76.0	71.2	66.0	53.4	68.7	69.4
幼児児童生徒がスポーツに取り組む時間を確保するための移動手段の充実(スクールバスの増便など)	25.0	28.0	27.0	39.8	19.2	35.4	41.9
その他	5.4	4.0	2.7	5.8	4.1	6.1	1.6

3. 調査結果(事例調査)

全国の特別支援学校における部活動・クラブ活動の状況や学校体育施設の状況、学校体育施設を拠点とした障害者のスポーツ活動状況などを明らかにするために、特徴的な学校に事例ヒアリング調査を行った。

図表 2-50 事例調査で対象とした特別支援学校

自治体名	学校名	学校種区分	学級実態	特徴
東京都	東京都立 清瀬特別支援学校	知的障害 (単置校)	小学部 中学部 高等部	運動部活動に参加できない重度・重複障害の生徒にもスポーツの機会を提供 生徒と卒業生と一緒に活動するサークルで大会に参加 夏季休業中のプールに加えて、体育館やグラウンドも地域に開放
石川県	石川県立 いしかわ特別支援学校	知的障害 肢体不自由 (併置校)	小学部 中学部 高等部	知的障害、肢体不自由の生徒が、合同で運動部活動・サークル活動を実施 卒業後の生涯スポーツにつながる指導で生徒の自立心を育成 隣接する医療センターの子供たちに体育施設を開放
滋賀県	滋賀県立 甲南高等養護学校	知的障害 (単置校)	高等部	同じ敷地内の一般校と合同部活動を実施 一般校と養護学校の顧問教員の綿密な連携体制 合同部活動が健常者の障害理解と障害者の社会性の向上の場に

東京都立清瀬特別支援学校

運動部活動に参加できない重度・重複障害の生徒にもスポーツの機会を提供

児童生徒と卒業生と一緒に活動するサークルで大会にも参加

夏季休業中のプールに加えて、体育館やグラウンドも地域に開放

1. プロフィール

(1) 設立経緯

知的障害のある児童生徒のための学校として1979年に開校した。小学部・中学部・高等部の三学部を設置し、豊かな地域生活を見通した指導と移行支援を実現する学校づくりを目指し、「自己選択・自己決定」「社会参加・自立」をキーワードに教育活動を展開している。

(2) 児童生徒数

小学部 90 人、中学部 84 人、高等部 158 人で児童生徒総数は 332 人である。

2. 運動部活動の現状

(1) 目的

運動部活動は、生活指導をはじめ、チームワークを培い、チーム内における自己の役割を認識するうえで効果的である。部活動を通して、集団における規範意識の向上、他者との関わり方等、社会性を身に付けることを目的としている。

(2) 実施種目・部員数

高等部の生徒を対象にしている。男子は、種目別では人数不足で活動が継続できないため、「男子運動部」として複数の種目を実施している。女子は、生徒数が少ないため、定期的に大会参加が可能なバスケットボールに特化した「女子バスケットボール部」を設置している。部活動への参加条件として、自力通学、帰着連絡、緊急時の対応ができる生徒を対象としている。

(3) 運営体制

バスケットボールとサッカーの指導体制は、有資格者の教員を含め、複数の担当教員で対応している。バスケットボールの指導は全国障害者スポーツ大会のバスケットボールの審判を務める教員を中心に行っている。人事異動にも対応できるように、若手教員を中心に資格の取得を推奨している。毎年行われる「男子運動部」の夏合宿には、指導担当者の高等部の教員に加えて、小学部、中学部の教員が有志で参加サポートをしている。大会前には、近隣の特別支援学校との合同練習や練習試合を通して、交流を図っている。



図表 2-51 清瀬特別支援学校の部活動の詳細

部名	男子運動部		
種目	サッカー	ソフトボール ティーボール	バスケットボール
実施時期	2月～7月	7月～10月	10月～2月
参加人数	30人(高等部)		
担当教員数	4人		
活動日	月、金曜日の15:30～18:00、水曜日の14:30～15:30		
活動場所	グラウンド	グラウンド	体育館
出場大会	東京都障害者スポーツ大会 サッカー王選手権大会	特体連ソフトボール大会 特体連ティーボール大会	東京ゆうあいバスケットボール大会 特体連バスケットボール大会

部名	女子バスケットボール部		
種目	バスケットボール		
実施時期	通年		
参加人数	15人(高等部)		
担当教員数	3人		
活動日	月、金曜日の15:30～18:00、水曜日の14:30～15:30		
活動場所	体育館		
出場大会	東京都障害者スポーツ大会 東京ゆうあいバスケットボール大会 特体連バスケットボール大会		

注)特体連は、全国特別支援学校体育連盟の略称。

(4) その他

運動部活動への参加が難しい重度・重複障害の生徒については、体育の授業でルールや体の動きを習得して、「東京都特別支援学校・特別支援学級設置学校総合体育大会」のワンベースキックの部とキックベースの部に10年以上参加している。

3. 余暇活動としてのスポーツの実態

(1) 余暇活動団体について

部活動に参加できる生徒は、卒業後も地域のスポーツ施設等を利用することができるが、部活動に参加できない生徒は卒業後もスポーツをする機会が限られてしまう。また、ルールが理解できず、部活動に参加できない生徒も少なくない。こうした状況をうけて、余暇活動団体として、生徒と卒業生と一緒に活動できるサークルを立ち上げた。継続して活動するために、道具不要、費用がかからない、重度障害の生徒でも参加しやすい、気軽に体を動かせる、を条件にランニングとダンスを選択した。

図表 2-52 清瀬特別支援学校を拠点とした余暇活動団体(スポーツ関連)

クラブ名	くぬぎランナーズ	ハッピーダンス・ピピ!
参加対象	小学部、中学部、高等部 卒業生とその保護者	高等部 卒業生
参加人数	約70人	約45人
種目	ランニング	ストレッチ、エアロビクス、ダンス
活動日	第2日曜日(10:00~12:00)	年5~6回 (第2または第3土曜日)
活動場所	学校およびその周辺	体育館
活動実績	「清瀬市民マラソン大会」参加 「所沢シティマラソン大会」参加 「昭和記念公園リレーマラソン大会」参加	「清瀬特別支援学校 夏まつり」出演 「にぎやかカーニバル(東久留米市後援)」出演
年会費	1,000円(保険代)	300円

□くぬぎランナーズ

2004年にマラソン大会に出場を予定していた教員が、生徒と一緒にランニングできるサークルとして立ち上げた。一般のマラソン大会に参加するなかで、社会参加も同時に行うことを目的としている。現在は、保護者が運営の中心を担っており、生徒の父親同士の交流の場にもなっている。

□ハッピーダンス・ピピ!

2003年にダンス好きの教員が生徒と一緒にサークルを立ち上げた。卒業後も続けたいとの要望を受け、卒業生も活動に参加している。夏まつりへの出演などにより地域との交流を図っている。

(2) 課題

余暇活動は教員が主体となって運営してきたため、人事異動に伴い、引き継ぐ教員がいなくなってしまう恐れがある。さらに、部活動ではないため、新規配属の教員が支援に入りにくい事情もある。障害者のスポーツ活動の場として継続的な活動をしていくためには、保護者等に運営を委ねていくなど、地域を含めた活動基盤を築いていく必要がある。

4. 学校開放施設

(1) 学校開放施設について

体育館、グラウンド、屋内プール、プレイルームについては、自校の児童生徒以外にも開放している。屋内プールは温水ではないがガラス張りのため、天候に左右されず、一定の室温が保たれる。一方で、設立当初は重度障害の児童生徒が多かったため、プールの水深が浅く、20m規格であった。そのため、現在の児童生徒や一般への学校開放においては、使いにくいとの声も上がっている。

(2) 学校開放施設を使った活動

1) 障害者のためのプール開放事業

都立学校開放事業実施要項に基づき、都内在住または在勤の障害のある人々で構成された団体、グループを対象に、障害者のためのスポーツ活動の充実、健康の保持増進を目的に、プール開放事業を実施している。

2013年度は全10回の開催で、地域の障害者163人、学校の児童生徒52人の合計215人が参加した。団体としては、児童生徒が放課後に利用する支援団体や卒業生が通っている作業所・工房など6団

体が利用した。利用に際しては、団体の代表者が集まる調整委員会を開催している。議題は、第1回が施設説明および緊急時の対応確認、第2回が利用日程の調整、第3回が事業終了後の反省会である。周囲に気をつかうことなく、ゆったりと楽しめる機会であると、参加団体から次年度以降の継続希望も多い。

2) 地域との連携

地域の放課後・余暇支援団体を対象に、公開講座「障害のある子へのコミュニケーション支援者育成講座」を開催し、カード作成や教材の紹介、手順表を使った調理等を実施している(都立学校公開講座ボランティア養成講座)。講座を通して、児童生徒とコミュニケーション方法等を中心に共有することができている。また、「ハッピーダンス・ピピ！」にも参加してもらい、余暇活動の選択肢の一つとして交流の場を設けている。また、移動支援団体へ毎週火、木曜日に自校体育館を貸し出し、児童生徒と遊びの会などの余暇活動を開催している。



3) 健常者のスポーツ団体の利用

月2～3回、学校行事のない日曜日に地域の女子サッカーチームが利用している。また、地域のリトルリーグがグラウンドの芝生育成期間中の代替練習場として利用している。

東京都立清瀬特別支援学校

- 所在地：東京都清瀬市松山3-1-97
- 開校年：1979年
- 学校種区分：知的障害
- 学級実態：小学部、中学部、高等部

石川県立いしかわ特別支援学校

知的障害、肢体不自由の生徒が合同で運動部活動・サークル活動を実施
卒業後の生涯スポーツにつながる指導で生徒の自立心を育成
隣接する医療センターの子供たちに体育施設を開放

1. プロフィール

(1) 設立経緯

2006年に県内で初めての総合養護学校として、石川県立総合養護学校（肢体不自由教育部門）が開校し、2年後に知的障害教育部門が設立された。2010年に「いしかわ特別支援学校」に学校名を変更し、知的障害教育部門高等部産業技術コースを設置した。

(2) 児童生徒数

肢体不自由の児童生徒の約8割が知的障害を併せ持つ重度・重複障害者であり、知的障害の児童生徒の約7割が自閉症である。210人の収容想定人数を大きく超えており、来年度は、特別教室を普通教室に転用して児童生徒を受け入れる予定である。

図表 2-53 いしかわ特別支援学校の生徒数内訳

(人)

	小学部	中学部	高等部	合計
知的障害	65	56	84	205
肢体不自由	51	42	44	137
合計	116	98	128	342

2. 運動部活動・サークル活動の現状

(1) 目的

- ・スポーツを通して、心身の健康と豊かな心を育む
- ・思いやりや支えあう言葉を育て、楽しみながら教養を高める
- ・技能の習得、記録の向上を目指し、体力の維持向上を図る

(2) 実施種目・部員数（運動部活動）

中学部、高等部が合同で運動部活動・サークル活動を実施しており、知的障害と肢体不自由の生徒が一緒に活動している。活動期間は、5月から3月までの毎週火、木曜日の15:30～16:30で、部活動の参加条件として、自主下校ができる者で健康上支障がない者としている。入部当初は、障害の状態が把握できない場合などがあるために、保護者参観で活動を始める生徒もいる。



図表 2-54 いしかわ特別支援学校の運動部活動

(人)

部活動	活動場所	肢体部門		知的部門	
		生徒数	顧問数	生徒数	顧問数
陸上部	グラウンド	3	4	12	6
水泳部	プール	0	2	10	6
フライングディスク部	テニスコート	1	2	8	4
ソフトボール部	グラウンド	1	1	5	4

□陸上部

卒業後の生涯スポーツにつながる指導を重視している。市民マラソン大会に参加する際には、申込から会場への移動、当日のエントリーにいたるまで、自立に向け、毎年、顧問が手伝う範囲を狭めている。その結果、卒業後に自らの意志で準備をして、マラソン大会に参加する者が出てきた。

□水泳部

プール練習は、6月～10月中旬で、冬季は室内トレーニングを行っている。ハロウィック水泳療法協会の研修を受講した教員が指導にあたっている。入部当初は、顔を水につけられない生徒が3年かけて泳げるようになるなどの姿がみられている。具体的な身体的イメージを持つのが難しい生徒が多く、フォームの改善などの指導は非常に難しい。一方、自己の技能を磨き、全国高等学校体育連盟(以下、高体連)主催の大会に出場する生徒もいる。

□フライングディスク部

肢体不自由、知的障害の生徒と一緒に出場できる大会や、社会人もエントリーできる大会があるため、生涯スポーツにつながりやすい。石川県の「スペシャルコーチ招聘事業」で年間20回、県フライングディスク協会の理事長の指導を受けている。

□ソフトボール部

参加を希望した卒業生も受け入れて活動している。歩行器を使用している生徒が、片手で歩行器を使うように筋力トレーニングを重ねて、一緒にティーバッティングが行えるようになった。

(3) 実施種目・部員数(サークル活動)

週2回の運動部活動には参加できないが、スポーツを楽しみたい生徒のために、週1回のサークル活動もある。体温調整の難しい生徒への配慮から、活動期間は、冬季期間を除いた5月から11月までの毎週火曜日の15:30～16:30である。参加条件は、自主下校ができる者、または原則として保護者が16:30に迎えに来られる者としている。



図表 2-55 いしかわ特別支援学校のサークル活動

(人)

サークル	活動場所	肢体部門		知的部門	
		生徒数	顧問数	生徒数	顧問数
ボウリング	小体育館	10	9	12	8
電動車椅子サッカー	大体育館	5	5	0	0
卓球・レクリエーション	エントランス	15	14	9	5

(4) 運営体制

協力員を含めた複数名の顧問と、生徒の状態を把握している担任が指導にあっている。課・学部・学年の分掌業務の軽減を考慮したうえで配置している。

(5) 課題

部活動では安全確保の観点から、限られた教職員の中で、すべての希望者を受け入れるのは難しく、自立できる生徒に限られている。

3. 学校開放施設

(1) 学校開放施設について

大体育館、小体育館、グラウンド、屋内プールについては、自校の児童生徒以外にも開放している。設計上、大体育館には、一般開放を想定した出入口、トイレが設けられているが、グラウンドには、一般利用者のためのトイレは設置されていない。

(2) 学校開放施設を利用した活動

1) 夏季休業中などの活動

夏季休業中、石川県の事業である学校開放講座の一つとして、ハロウィック水泳講習会を4回行っており、卒業生も参加している。また、夏季休業中以外でも、近隣の石川県立医王特別支援学校がプールなどを授業に利用している。

2) イベント活動

隣接する「金沢こども医療福祉センター」の運動会および夏祭りなどの行事、地域のお祭りや民謡大会、グランドゴルフ大会などに大体育館やグラウンドが使用されている。8月には、学校を会場として、日本障害者スポーツ協会公認初級指導員養成講習会を開催している。

3) 定期的な活動

「金沢こども医療福祉センター」に入所している子供たちが、毎週木曜日に小体育館で車椅子バスケットボールを行っている。年数回、テニスコートを利用した車いすテニスも実施している。

4. その他

知的障害教育部門の中学部、高等部では、毎朝 20 分間、「朝の体力づくり」の時間を設けて、主に体を動かすことを目的に、ランニング、ダンス、柔軟体操、ラジオ体操などを行っている。また、有志のグループの県高等学校合同ダンス発表会への参加も続けている。

スポーツフェスタ(運動会)では、開会式、閉会式、および合同種目は肢体不自由、知的障害の生徒が

合同で参加するが、それ以外の種目は、体温調整などで長時間、外にいることが難しい生徒もいるため、肢体不自由、知的障害ごとに別々の時間帯で実施している。

石川県立いしかわ特別支援学校

○所在地：石川県立金沢市南森本町リ 1-1

○開校年：2006 年

○学校種区分：知的障害・肢体不自由

○学級実態：小学部、中学部、高等部

滋賀県立甲南高等養護学校

同じ敷地内の一般校と合同部活動を実施

一般校と養護学校の顧問教員の綿密な連携体制

合同部活動が健常者の障害理解と障害者の社会性の向上の場に

1. プロフィール

(1) 設立経緯

甲南高等養護学校(以下、甲南養護学校)は、2007年に滋賀県立甲南高等学校(以下、甲南高校)の敷地内に併設する形で開校した。両校ともに「独立自尊 誠実勤勉 協同友愛」を校訓として、教職員、生徒が一体となって教育活動を推進している。施設や設備等についても共有しており、校訓以外にも、校章、校旗、校歌、制服が同じで、学校行事も共同で開催している。

(2) 生徒数

軽度の知的障害者(多くが発達障害との重複障害)で、滋賀県内に住み、自力で日常生活が送れる者を対象としている。高等部のみで、合計71人(1年生24人、2年生23人、3年生24人)で、全員が自転車、および電車・バスなどの公共機関を利用して通学している。2年次より、「農業ものづくり」「福祉くらし」の2コースに分かれる。

2. 運動部活動の現状

甲南養護学校では、原則、文化部を含めて部活動には全員加入で、約4割の生徒が甲南高校との合同部活動、約6割が甲南養護学校のみでの部活動に参加している。現在、合同部活動を実施している運動部は、陸上部、卓球部、柔道部、弓道部である。

活動時間は、平日(月～金曜日)が15:50～18:10、土曜日が8:30～11:30となっている。

(1) 目的

1) 「生きる力」の強化

自ら考えて活動することを信条としており、将来の就労に向けて、社会性を身に付ける観点からも、報告、連絡、相談の徹底や公共交通機関の利用を積極的に推奨し、「生きる力」を強化する。

2) 忍耐力の育成

負荷の高い練習に取り組む中で、自分と向き合い、困難に立ち向かう忍耐力を育成する。学外の会場で、見知らぬ人に囲まれた中で対外試合に臨むことで、適応能力を磨いていく。

3) 努力の大切さ

継続して努力していく中で、結果を残して、自分自身への自信につなげていく。そのプロセスで習得した能力を他の場面で応用できるようにする。



(2) 実施種目・部員数

図表 2-56 甲南高校と甲南養護学校の合同部活動の部員数

(人)

部活動	活動場所	甲南高等学校	甲南養護学校
陸上部	グラウンド	15	9
柔道部	格技場	2	2
卓球部	格技場	8	8
弓道部	弓道場	22	1

□陸上部

短距離、中長距離、投てきなどの種目に分けて、専門性のある顧問が指導している。顧問は甲南高校3人、甲南養護学校3人の合計6人がおり、加えて、外部指導者として、デフリンピックのハンマー投げの選手も招いている。基本的な練習メニューは同じで、伝わらなかった場合のみ個別指導を行う。練習タイムを毎日記録しており、タイムが向上することをモチベーションにして練習に励んでいる。高体連主催の大会にも出場している。

土曜日の練習は近隣の陸上競技場で実施し、卒業生にも積極的に声をかけることで、生涯スポーツのきっかけとなるよう働きかけている。

□柔道部

外部指導者を招いて指導を行っている。地域に柔道場がないため、近隣の高校生や社会人も参加している。指導時には、出来たことはその場で褒め、出来なかったことはその場で説明して、理解してから次の練習に移るよう注意している。柔道を通じて、技術面の向上だけでなく、将来的に社会で生きていくための礼儀や心遣いなどを意識的に教えている。



(3) 運営体制

兼務発令を出し、両校教員が顧問となっている。甲南高校との「合同運営委員会」や「合同職員会議」を通して、スケジュールの共有、顧問同士の綿密な連絡調整を行い、両校の顧問が両校の生徒を指導できる体制を整えている。

(4) 合同部活動の成果

一般校の生徒と教員にとっては障害理解に、養護学校の生徒にとっては社会性の向上に役立つなど、ノーマライゼーションの場となっている。陸上部では、両校が同じスケジュールやメニューで練習している。甲南高校の部員は養護学校の部員の頑張りに刺激を受け、養護学校の部員は甲南高校の部員と同じメニューをこなせることが自信につながるといった相乗効果を生んでいる。高体連主催の大会への参加、陸上競技場での合同練習など、健常者との交流が日常的になっている。

また、卓球部では、甲南高校と養護学校それぞれにキャプテンがいるが、甲南高校のキャプテンが不在の際、養護学校のキャプテンが全体の練習の指示出しをすることもある。

3. 甲南養護学校の放課後活動

甲南養護学校のみの放課後活動として、毎週火、木曜日に約 1 時間、目的に分けて「体力づくり部」として活動している。「競技志向グループ」では、障害者スポーツ大会のサッカー競技への出場を目指しており、「楽しみ志向グループ」では、サッカー、ソフトボール、フライングディスクなどを中心に約 30 人が参加している。雨天時は、ダンスやウェイトトレーニングなどを行っている。

また、体重の維持管理を目的に、陸上部の活動に参加し、グラウンドでウォーキングを行う生徒もいる。

滋賀県立甲南高等養護学校

○所在地：滋賀県立甲賀市甲南町寺庄 427

○開校年：2007 年

○学校種区分：知的障害

○学級実態：高等部